88-4 no.57

「伸ばそう若い力

—明日を担う働く青少年—」

（昭和55年度「勤労青少年福祉シンポジウム」記録）

勤労青少年のシンボルマーク

56年2月

山梨婦人少年室
56. 3. 3
山梨婦発第　号

年少労働課
資料 No. 134

労働省婦人少年局

56/2

はしがき

勤労青少年福祉シンポジウムも回を重ねて第九回を迎えました。勤労青少年指導者その他の勤労青少年福祉関係者が一堂に会し、当面する諸問題について研究討議するとともに、相互の連携と親睦を深めるこの行事は、関係者の方々の多大な関心を集めております。

本年度の研究討議テーマは、本年の勤労青少年の標語である「伸ばそう若い力―明日を担う働く青少年―」を取り上げ、八〇年代を通じて若い力を伸ばすべき方向や方法を探っていただいたところです。

関係者の方々の明日へのよりどころともなるよう、当日の特別講演及び研究討議の速記録を発行し、参考に供することといたしましたので、ご活用下さい。

昭和五六年二月

労働省婦人少年局

目次

昭和五五年度勤労青少年福祉シンポジウム概要 …… 1

労働事務次官あいさつ …… 2

特別講演「海外雄飛のロマンティシズム」 …… 4

研究討議「伸ばそう若い力―明日を担う働く青少年―」 …… 13

（各講師の意見発表） …… 14

（全体討議） …… 18

昭和五五年度勤労青少年福祉シンポジウム概要

一　趣　旨

勤労青少年の健全育成や福祉の向上に関し、全国の各分野で活動している勤労青少年指導者その他の関係者が、当面する諸問題について総合的に研究討議を行うとともに、広く意見を交換して相互の理解と連携を深めるため、勤労青少年福祉シンポジウムを開催する。

二　開催日時及び場所

日時　昭和五五年一〇月二九日（水）
　　午前一〇時三〇分～午後四時
場所　東京都千代田区大手町
　　日経ホール

三　内　容

第一部

開会のことば
　労働省婦人少年局長　高橋久子
あいさつ
　労働事務次官　桑原敬一
特別講演「海外雄飛のロマンティシズム」
　東京大学教授　衛藤藩吉

第二部

研究討議「伸ばそう若い力―明日を担う動く青少年―」
司会
　昭和女子大学講師　加藤地三
講師
　社団法人勤労厚生協会専務理事　宮川貴善
　日本産業カウンセリングセンター理事長　野原蓉子
　松本市勤労青少年ホーム館長　道正栄
　東京都武蔵野青年の家（東京都教育委員会社会教育主事補）　西村美東士
閉会のことば
　労働省婦人少年局年少労働課長　金平隆弘

四　参加者の範囲

(一) 勤労青少年ホームの館長及びその他の職員
(二) 勤労青少年ホーム以外の勤労青少年福祉施設の職員
(三) 都道府県及び市町村の労働福祉担当職員
(四) 勤労青少年福祉推進者
(五) 勤労青少年福祉員
(六) 勤労青少年育成・福祉団体関係者
(七) その他の勤労青少年育成・福祉関係者

労働事務次官あいさつ

日ごろから勤労青少年の育成の問題につきまして、あるいはまた福祉の向上につきまして、私共の行政に非常に御尽力をいただいていることを心から厚く御礼申し上げます。

働く若者たちの今後の育成につきましては、いつの時代におきましても重要なテーマであり、特に一九八〇年代は非常に不確実な、不透明な時代といわれておりますが、それであればあるほど青少年のいくべき方向・指針というものを示していくことが私どもの責務ではないかと考えるわけでございます。

一九八〇年代というのは、よくいろいろなことが言われております。第一に、長い職業生涯が訪れてきております。人生五〇年といわれていたのが、現在では男は七三・五歳、女は七八・九歳ということで、七〇余年の生涯というものを私どもは非常にいい意味において迎えております。こういった長い生涯の間に、これからの若い人たちがどのような職業生涯を過ごしていくかということが重要な問題となっており、特に高齢化社会になりますと、ややもすると活力のない社会になるおそれがありますから、若い時からそのライフステージに合った、その人たちの育成の指針を示していくことがきわめて重要であろうと思いますし、そうした若い人たちが活力を持って、また社会に対する適応性、あるいは創造力を持って、その職業生涯が送れるような導き方がきわめて大事であろうと思います。

第二に、昭和三〇年代後半から高度経済成長が始まるわけですが、当時は新規学卒就職者の六一パーセントが中卒でした。現在では大卒が四二万人、高卒が六〇万人に対して中卒が七万人を切り、六パーセントというようなことで、非常に高学歴化の時代を迎えようとしております。リクルートセンターの調査によりますと、大卒の人たちに、将来管理職になれる可能性があるかという質問をしたところ、約九割の方がなり得ると、回答しておりますが、昭和二〇年ごろは、五割ぐらいの大卒の方が管理職になっているようですが、昭和五〇年代では二割の方しか管理職になれていません。

したがって、いままでのような管理職指向型、あるいはホワイトカラー指向型の職業を求めていくということでは、私はこれからの日本の社会というものが対応できないのではないか、一種のエスカレーターに乗っていく、ぬるま湯につかったような職業生涯設計というものではいけないのではないかと、考えております。

これからの若い人たちは、常々その生涯のポイントごとと言いますか、節目節目で勉強をやり直して、自分の専門を身につけていくというような、職業生涯の送り方をしていくことがこれから先の高学歴化社会においては必要になるのではないかと思います。

第三には、日本は安定経済成長化時代を迎えて、資源のない我が国としましては、つまりは勤労者の力によって物を作り、それを輸出していく、いわゆる貿易立国として進んでいかなければなりません。そういった意味で、私どもはいままで以上に国際的な感覚を持った若人を育てていかなければならないと思います。

今日は衛藤先生から、まさにそういった意味での格好なテーマでお話があることを非常にうれしく思います。しかしながら、外国では、日本は自動車の問題、あるいはテレビの問題等で、きわめていろいろな注目を受けております。その結果、労働時間の問題とか週休二日の問題というようなテーマで、いろいろと日本の実情を問かれるわけでございます。

アメリカの自動車産業界で二、三〇万人の失業者が出たのは、日本

の自動車のためだと言われており、二、三日前も、イギリスの下院議員の方が来られましたけれども、日本の品物を輸出した国々では深刻な失業問題が起こっているということで、きわめて強い対日批判をいっております。

このようなことに対して、私どもはやはり日本を正しく理解してもらうためにも、外国の方が来られ、また私どもが外国に行った時には、積極的に日本の実体、実情を知らせておりますが、これからも国際協調の中で日本が貿易立国として、仲良くよその国とつき合っていくことは大切であり、国際時代にふさわしい勤労青少年を育成することが大事ではないかと思います。

一九八〇年代の勤労青少年の諸問題に関しこのシンポジウムを通じてそのあり方、指針についてどうか一つの成果が生まれますように心からお願いしたいと思いますし、労働省としましても、皆様方の御提言に従っていろいろと施策を講じてまいりたいと思っております。私どもは婦人少年局を中心として、この青少年問題を全省的な問題として取り上げて、いろいろと部内で討議を加え、それに対するソフトウェアーなりハードウェアーというものを十分整備をしながら、勤労青少年の育成・福祉の向上に努めて参りたいと思います。

これからの厳しい経済社会環境の中でたくましく若人が育ち、そしてその結果日本が活力のある社会として今後益々発展いたしますための根本には、これから育つ若人の、まさに健全育成の問題ではなかろうかと思います。皆様方の日ごろの御苦労に感謝申し上げるとともに、所見の一端を述べまして御礼のことばといたします。どうもありがとうございました。

昭和五五年一〇月二九日

労働事務次官　桑原敬一

〈特別講演〉

「海外雄飛のロマンティシズム」

東京大学教授　衛藤瀋吉

東アフリカのケニアの首府ナイロビはたいへんな近代都市でございますが、一歩町から出ますと見るからに貧しい寒村が点在するのみであります。ナイロビから車に乗りまして西へ西へと参りますと、例のアフリカ大地溝帯に入りますので、一旦ずっと高いところに登りまして、それからただ降りに降りて谷の中に道が沈みます。そしてまた地溝帯を横切りますと、また上がってまいりまして、火山だらけの山地に入ります。次々と火山を過ぎてさらに西へ、西へと参ります。そのうちに電灯線もなくなりまして道路だけが西へつながっているところをずっと行きまして、もうウガンダ境めがけて参ります。すると熱帯直下であるにもかかわらず、たいへん寒い高地帯に入ります。たまたま私が行ったときは、最初ひょうが降って、そのうちに雪が降って暖炉にたき火をたいて、一晩震えながらホテルで過ごしました。そこはトムソンフォールというちょっとした避暑地がございまして、そこで一晩泊まって、さらにまた車で西へ、西へと参りまして、もうウガンダの国境がすぐ眼下に見えるという所まで参りました。その辺は、草原の中にポツン、ポツンと部落があるというようなわびしい所でございます。

一方ウガンダは電力の豊かな国でございますので、丘の上に立って夜西のほうを眺めますと、ウガンダの方は明るい部落があちらこちらにこう見えるのですが、こっちのケニア側はもう真暗だという、そういう所まで参りました。そしてその村の学校、村の学校といっても、もうほんとうに小さな掘っ立て小屋、土で作った掘っ立て小屋で、教室が二つくらいしかないし、学校の先生は三人です。そこに行きましたら、日本人の少女が一人いるのですね。長崎大学の薬学を出たというお嬢さんで、ボランティアの理数課の教師としてケニヤにやって参りまして、この村に配属されたというわけなんです。

そもそも発展途上国では技術を持っている人はたいてい大都会に集中する傾向があります。ところがケニアでは、この間なくなりましたケニアッタ大統領はたいへん農民の教育に力を用いて、村々に、その土地のことばでいうとハランベスクールをいっぱいつくっている。ところが学校はつくったけれども、そしてまあまあ字を教えるような先生はいるけれども、足し算、引き算、掛け算、そういう理科や算数を教える先生がいない。みんな大都会に行ってしまうのです。それで外国の人たちの助けを求めているということで、日本から青年海外協力隊のルートを通じて、そのお嬢さんはそこに行ったわけなのです。そして彼女は学校のすぐわきの一〇畳敷きぐらいの土間の、土で作った小屋に住んでいるのですが、その彼女の家に入りますと、大きな字で、英語でもって「緊急のときはナイロビのこれこれに電話をしてください」と大きく二つの電話電号が書いてあるのが目に入ります。一つは日本大使館でもう一つはナイロビに駐在している青年海外協力隊の事務局員の電話です。つまり彼女は二年間、そこでたった一人で過ごしますので、何かが起こったとき、まわりに日本人もおりませんし、面倒をみてくれるような人もおりませんので、何百キロメートルもはなれたナイロビの日本人が唯一のたよりなのです。そんなへんぴなところですから、はじめのうちは、どんなに心細かったか、淋しかったか、そしてこわかったか、想像に絶するものがあったことでしょう。

ともかくパンを買いに行くのにバスでもっ

て五時間ぐらい行かなきゃならない。そのバスは一日一度しか通らないというような所です。しかし、私がそのお嬢さんに会いましたとき「たいへんだろう」と言いましたら、「いや、来て良かったわ」と言うのですね。ここに来て、初めて生きがいを感じた、そして、できればもっといたい、二年と言わずもっといたいんだけれども、お嫁さんにもいきたいし、やっぱり帰らなきゃね、と言って笑っていました。しかし、惨たんたる日常生活でしてね。とにかくパンを買いに行って、そのパンがある間はいいのですけれど、それがないときは村の人とおんなじイモを食ってすごします。そして水は井戸を掘っても水が出てこないのです。（これは実は井戸を掘る技術の問題があるのですけど）それで天水をためます。屋根の水を集めまして、それをドラム罐にためておく。それが唯一の水資源でございまして、その生活を物的面だけで見ますと、もう実に貧しい生活をしているわけでございます。私は日本からゆであずきの罐詰を三つ、形ばかりの手みやげに持って行ったのですが、差出すと「ウァーすごい。」と罐をだきしめて喜んでくれました。

しかしその学校の校長先生に当たる三〇くらいの人が出てきまして、英語で――ケニアはイギリスの植民地でございましたので、英語がたいへんよく通じるんですが――この日本の女の人はこの村の宝だと、こう言いましてね、帰ってもらいたくないんだけれども、本人が帰らなきゃならないと言っているから、自分たちは大変残念なんだとくり返し、くり返し言っておりました。もう私がいる間に五、六べんはそれを言ったでしょう。そういう思わざるところに日本人がいるわけでございます。

私は人間というものは、エキゾチックな、まだ見ない世界、「山のあなたの空遠く」にですね、なんかこう「幸い住むと人のいう」ような気がするし、そこに何かロマンティシズムがあるような気がする、そういったまだ見ぬ世界へのあこがれはたいへんなものだと思うのです。こんなに便利になって世界中に自由に行けるようになったいまでも私はそういう人間のあこがれや情緒は強いと思うのです。

われわれの祖先を考えてみますと、たとえば江戸時代のような一種の封鎖された社会の中ですと、精神がりっ屈しましてね。だから日本の当時の江戸時代のやや学問のある人は、こぞって長崎に行きたがったでしょ。そして長崎に行きますと、こぞって外国の事情を知りたがった。私自身そういう当時の人たちの気持ちに最初に接しましたのは、実は学生のときなのです。

東京大学の附属図書館の中に写本がありまして、「阿芙蓉異聞」という写本なのです。阿芙蓉というのはアヘンのことなのです。異聞はめずらしいうわさということですね。内容はアヘン戦争についての聞き書きです。私はその写本は一つであって、東大図書館にだけあるもんだと思っていたのですけど、そうじゃないんですね。それがもう至るところにあるんですよ。ということは、アヘン戦争の聞き書きを長崎通事が最初は将軍家にそれを報告するため書いたんでしょうね。それを一生懸命あっちこっちでおさむらいたちが写したわけです。それだからあっちこっちにあるんです。それで、江戸時代の知識人は外国のことを知りたかったんだなと実感したのです。

頼山陽にナポレオンについての長い詩があるのを御存じでしょうか。これは長崎に行ってナポレオンのことを聞きまして、それでさっそく詩を作ったのです。

そういうふうに、まだ見ぬ世界について一つの憧れを持つということが、これはあったのです。これは明治になってくるとそれが爆発いたしまして、ずいぶん日本人は外国にいろいろな夢を抱いて出ております。ここには九州の方もおいでだと思いますが、孫文の変わらぬ友人として最後まで孫文が最も信頼していた日本人は、宮崎寅蔵という全く無名の

男で、号を滔天と称しますが、この滔天はやっぱりある意味では当時の落ちこぼれで酒のみで女遊びが好きでまともな学校生活を送っておりません。彼は最初にアメリカに行きたくてしょうがなかったのです。それから縁があって中国に行きまして、揚子江から中国大陸の陸地が見えたとき、彼は「思わず泣けり」と、こう自伝の中で書いてあるのです。ものすごく感激したらしいのです。そして彼は一生生涯を中国革命に賭けまして、貧困のうちに生涯を終えるのです。彼の三三歳のとき書きました、「三十三年の夢」という、前半生の自伝がありますが、これは名著でございまして、私など非常に愛読しているのです。

この大陸浪人ですが、大陸浪人のロマンティシズムが一体外国人に通じるだろうかということが非常に興味がありまして、私のプリンストン大学にいる友人と一緒にそれを英訳いたしました。そうしたら驚いたのは、プリンストン大学の出版会がそれを出版させてくれという。立派に外国人にも通じる、よくわかると言うのです。それで私は人間の志、この情緒というのはどこでも同じだなということを感じたんでございます。そういうふうにして、明治の青年たちはいわばまだ見ぬ世界に憧れを持って、あるいは移民になり、あるいは大陸浪人になり、いろいろな形で海外に出ております。大陸浪人などと言うと、何かいまの教育の中ではたいへん悪者の右翼のように言われておりますけども、実際は必ずしもそうではないのです。人間として生まれて、そしてそういうロマンティシズムに身を任せたときに、歴史的役割りとしては日本の侵略に加担した人もいるかもしれません。たとえば与謝野鉄幹なんか、若いときに彼は韓国のソウルでやっぱり暴動を起こすその陰謀に加担しているわけです。そういうことがありましたし、それから自由民権の党主大井憲太郎は、中年のときにやはり朝鮮半島で暴動を起こそうとして爆薬を集めて、それが途中で発覚をして獄におりております。しかし、他方、山田長政という青森出身の青年は採文の革命のための武装蜂起に参加して、滔天は晩年日本の中国侵略に一貫して反対し、貧窮のうちに死にます。

そういうことで、いい、悪いというよりもむしろ人間自然の情として、そういうまだ見ぬ世界へのロマンティシズムがあって青年を海外へ駆りたてたという事実は否定できないでしょう。戦後しばらくはそういう海外へのロマンティシズムを押えられてしまったわけですね。押えられてしまいましたけれども、私はこれからの日本人にとってはそういう気持ちをいわば歴史の流れの中で正しくじょうずに使うこと、じょうずに生かすことは、私はすごくいいことじゃないかと思っております。

私自身もまだ子どものときに、一人で汽車で万里の長城を越えたことがあります。もうこの向こうにはゴビの砂漠があって、その向こうにはすばらしいお姫様でもいるんじゃないかと思いまして、そして天山のかなたには何かあるんだと、そういうものすごい情感の高ぶりみたいなものを感じたんですね。そしてそれをずっと持ち続けまして、三八、九のときでしたか、はじめて外モンゴルに行く機会があったわけですよ。そのとき日本はまだ外モンゴルを承認しておりませんから、日本人としては私しか戦後三人目くらいですね。そのころですから日本からモスクワに行って、モスクワからイルクーツクを経てウランバートルに入ったんですけど、長い飛行機での旅ののち雲の間からイリューシン一六というソ連のプロペラ機に乗ってだんだん下がっていって、雲が切れてぱっとモンゴルの草原が出てきたというか、見えてきたときは、もう思わず心臓がトコトコ、トコトコしました。いやあついに来たと、身の置き所がないです。もう飛行機の座席の中でそわそわしちゃって。それでウランバートルでの第一夜のその晩も嬉しくて眠れなかったです。というようなこともございまして、これは人間自然の情だろ

うと思うわけでございます。

ただ、明治の日本の青年たちは朝鮮や中国へ行って、そこで政治的に革命を起こそうとしたり、あるいは利権をあさろうとしたり、そういうことをやったわけです。それで「支那には四億の民が待つ」という馬賊の歌が戦前非常にはやったわけでございますが、要するにおれが出て行って、そして正義を実現してやるんだと、こういうことだったわけです。しかし戦後の日本は国際社会での役割として外国の政治に干渉するようなあり方を否定しております。国是として、そういうものはなくなってしまったし、またあってはならないと思っております。韓国にしても、北朝鮮にしても、フィリピンにしても、これは外国でございますから、外国の政治にやたら介入することは、これは侵略の志につながる態度でございまして、非常に危険だと思っております。しかし外国が困っている場合それに協力をすることについては、私は海外雄飛の人間の持っている情緒というものを生かして一向差しつかえないだろうと、そう考えているわけでございます。

幾つか私自身が経験したことを回想させていただきますと、たとえば天然痘を人類はだんだんつぶしてまいりまして、追いつめていったんですが、最後に追いつめて残ったところがエチオピアだったわけです。一九七〇年ごろにエチオピアだけに追いつめてしまったわけでございます。それでWHO（世界保健機構）が最後の天然痘絶滅作戦として、エチオピアの民衆に大規模な種痘を植える運動を興したわけです。ところがエチオピアというところは、いらした方はもうすぐおわかりだと思いますけど、ともかく首府のアジスアベバすら標高二、〇〇〇メートルくらいあるわけです。つまりだいたいが台地がたくさん集まった地形なのです。そして台地と台地の間はずっと低い谷になっていて、隣の台地に行くためには一旦谷にくだってまた台地に登らなければならない。大変険しい地形であります。そしてエチオピアの東のほうを、先程ご申しましたアフリカ大地溝帯が南北に通っている。そしてその大地溝帯のところは盆地になっていて雨が降りません。砂漠になりまして、熱帯、たいへんな暑さです。

まあ、そういうところで種痘をして村々を回るということは、これは楽なことではございません。そこで白人のボランティアもずいぶんWHOの、そのプログラムに協力したんですが、彼らはやっぱり、そういう奥地の村まで入れないのです。どこか体力的に違うのです。われわれの方がそういう気候の変化に対して、やっぱり強いですよ。それで日本人の青年を募集いたしまして、これも青年海外協力隊が世話役になりましたが、多いときは四、五〇名、日本の青年がエチオピアにでかけていって、エチオピア人と二人で組になりまして、村々を訪ねてまわりました。たいへんな断崖絶壁の間をもう車の通らないようなところを歩いてくだり、歩いて登っていって、そして台地の上にたどりつくと、部落があるというようなところを、一つ一つしらみつぶしに種痘をしてまわったわけです。

ところでここで注意していただきたいのは普通発展途上国でそういう大運動をやりますと、しばしばこういう現象が起こるんです。それは何かと申しますと、奥地の村に行って種痘をしたと称して、そして実は行かないとか、それから村には行ったけれども村人が種痘をいやがりますと、すぐ、まあいいや、来たからいいじゃないかということで、報告書はちゃんとやった風に書くとか、そういうことがしばしばあるわけです。人口増大の重荷に苦しんでいる国々に避妊の啓蒙運動をやる場合にもそれがございまして、避妊の実効がなかなかあがらないそれで非常に困るわけですよ。

ところが日本人はちがいます。御年配の方から見れば、いまどきの若い者はもう約束は守らんし、嘘はつくし、やる気はないし、困

ったもんだという、その若い者ですよ、これがだれもみていない、そういう奥地まで行って、ちゃんと種痘したんですね。これは私は当時エチオピアに参りまして、この目で彼等の活動ぶりを見て感心したのです。よくやるなと思いました。ごく平凡な、その辺の盛り場で酒を飲んでさわいでいる、あの青年たちです。そういう平凡な青年たちですから、実はアジスアベバに帰ってきますと、荒れるわけですよね。それで酒飲んであばれて警察につかまったり、協力隊事務所の駐在員に無理難題を吹っかけたりだいぶトラブルを起こしましてね。それからWHOの幹部さえも、あいつらはアムハラ語（エチオピアの公用語）も英語もできないし、どうもあまり程度が良くないなんていうようなことを言っていまして、評判は決して良くなかったのです。が、ただ一点、その任務だけは彼らは実直にやったんですね。その実直にやったおかげですよ、エチオピアでもついに天然痘が終息いたしまして、WHOが天然痘絶滅宣言をしたのがたしか七八年、おととしでございますね。ですから、外国にしばしばいらっしゃる方は、最近種痘の証明書さえもいらなくなった国が多いのにお気ずきでしょう。これを最後に追いつめたのは日本の青年たちの、しかもごく平凡な青年たちの努力でございます。そういうところに行くのは神様でもないし仏様でもない。ごく普通の青年でございます。だからアジスアベバに帰ってくると、酒を飲んであばれるわけですよ。そういう人たちが実はある一定の建設的な役割りを果たしているということがあるわけでございます。

それから、これは私、実はたいへんなことじゃないかと思うのが一つあるのですね。それはカスト制度のある国ぐにがございます。国によってはカストの制度は非常にきびしうございまして、一番下のハリジャン、不可触賤民（アンタッチャブル）の人たち以外は汚物はいじらない、糞、小便はいじらない。また上層のカストから出ている看護婦さんは、病院にいてもハリジャンの患者の面倒は見ないのが当然であると、こういうことになっていたわけですね。それから看護婦さんは汚物の世話はしない。ハリジャンの掃除人がいて、患者さんの汚物の世話をするというのが一九六〇年代、私がしばしばカスト制度のある国ぐにに行っていたころの正常な状態だったわけでございます。

それらの国に日本からいろいろなルートでもって看護婦さんが行っておりました。若い、それこそ二十二、三歳の少女たちでございますが、彼女らは日本で受けた看護教育がございますから、当然のように汚物の世話も何もいたします。はじめのうちはその国の看護婦さんが日本の看護婦さんのことを軽蔑するわけですね。あいつは汚物をいじっている、きたないわというわけで、なかにはハリジャン並みに扱われた日本人看護婦さんもいました。非常に働き心地が悪いという訴えを私は六〇年代に何度も聞きました。そのたびごとに、いや、そういうのをこらえるのが、いまの国際社会で必要なことなんだ、とにかく文化が違うときに、その異なった文化をやっぱり尊重してやらなきゃいかん、われの文化が正しいんだと言って、相手の文化や伝統をつぶそうとしてもなかなかつぶれないよ、だからがまんするよりしようがないというようなことを言って、なぐさめていたんです。ところが七二、三年ごろから病院の雰囲気が変わってきたんですね。つまり高いカスト出身の看護婦さんも、患者はカストの如何にかかわらず、患者として世話をせにゃいかんと、いうふうに考えだしたようですね。もちろん変わってないところもあると思いますけれども、町の大きな病院では非常に雰囲気が変わってきた。

これはごく平凡な看護婦さんの努力と忍耐の結果なのです。私は実は看護婦コンプレックスがございまして、大体病院がきらいな上にとくに看護婦さんには偏見があるのです。

私の勤めている大学の附属病院の看護婦には実に官僚的で、部外者や患者さんにはいばっている人がいるんですね。卒直なとこ、病気になっても自分の大学の附属病院には入院したことがありません。あそこに用があって行きますと、ろくろく挨拶もしない看護婦がよくいますね。そしてですよ、自分のところのお医者さんですと、もうへいこらへいこらしているのですよ。これはけしからんわけですね　私から言わせれば。外部からきた患者さんこそ大事にすべきであって、自分のところのお医者さんを下にも置かずもてなすというのは良くないと、私はこう思っておって、大体けしからん、教育が間違っておるなんて思っておりまして看護婦コンプレックスがとても強いのですよ。それですからかえって看護婦さんからチョッとでもやさしくされると、すぐほろっとするという面もあるのですが、要するに看護婦が苦手なのですけどね、インドに行って、あの苦手な看護婦はやっぱりたいしたものだと、深い敬愛の念を持つようになりました。

それじゃボランティアとして外国に行っている看護婦さんたちが立派な看護婦さんかというと、そんなことないですよ。ごく普通の看護婦さんです。例えば彼女らが問題を起こした例を挙げますと、こういうことがあったですね。ある病院で日本の看護婦さんのボランティアが三名行っていたのですね。その三名とも聞くと、日本の大病院から来ているわけですよ。それだから私が訪れるやいなや、三交替制もここにはありませんとか、私は外科で育てられてきたのに小児科の手伝いをさせられていますとか、私は小児科でずっと訓練を受けてきたのに、ここでは手術の手伝いまでやらされるんでかなわないわとか、こういう苦情をいやという程きかされてびっくりした経験があります。私は、いや、それは日本ではそうだろう、しかしはるかに医療設備が整っていないここでは、それはもう何でもやらなきゃいかんじゃないかと、それがボランティアというものなんだ、それから三交替とか何とか言っているのは、看護婦の手がたくさんあるところでの話で、ここだったらそんなことはできんし、救急の患者が来たら非番であろうとなかろうと、やらねばならんじゃないか、それがボランティアというもんだと、一生懸命納得してもらおうとしたわけですけれども、彼女等は納得しないんですね。私たちこんなつもりじゃなかった、腕が鈍ってしまうと文句をいうわけですよ。

たまたまそこの病院にカナダ人の三〇前後の若いお医者さんが働いておりました。これもボランティアで来ていたのです。カナダだったら、おそらくものすごい給料を取っていたろうと思うような人ですが、それがボランティアで来ていましてね、彼とお茶を飲みながら話したときに、その看護婦さんたちの苦情の話をしました。彼が笑って言うには、日本人の看護婦さんはボランティアが何であるかどうもわかっておらん、いろいろと勤務時間のことだとか何だとかいう、しかし、この二〇マイル四方で医者はぼく一人だ、それでぼくのところに連れ込んでくる患者といえば、たいていもうまじない師とか何とかの手を経た上で、どうにもならなくなって来たのが多い、ぼくは休む暇がないんだ、二四時間いつでもそういうのを処理しなきゃならん、私は本来皮膚科だったんだけれども、ここへ来て外科も覚えた、ここへ来て目の検査も覚えた、何でもやらされておる、それが生きがいだから、そしてそういうことをするためにぼくは来たんだから、それが当然だと思うんだけれども、日本人の看護婦さんはわかってくれん、衛藤さんから一つ丁寧に説明してやってくれ、というような話しでございました。

そういうふうな文句も言うごく普通の看護婦さんが、実は数千年続いたといわれるカスト制度をひっくりかえしつつあるのですね。これはすごいことだと思うのですよ。

今度はちょっと古い話になりますけれど、ルソン島の北のほうで瀬戸から行った青年が

窯を作って、村人に陶器の焼き方を教えていたことがあります。その青年に私は実は直接会わなかったのですが、フィリピン側の人にはたくさん会いましたが、これは一九六〇年代だったものですから、彼が行ったときは、しかもそこはルソン島でも激戦地だったものですから反日感情がまだ強く残っておりました。それで村人が石をぶつけるわけですよ、日本人だというので。彼はぶつけられた石を一つ一つ自分の部屋に持ち込んで、ずっと並べておいたそうです。そしてなぐられても、石をぶつけられても一切反応しないで、じっと歯をくいしばってこらえましてね、それで陶器を作っていたそうです。二年間の契約で行ったのに、結局彼はフィリピン政府の要請があって四年間いて、帰るときはもうだれにも石をぶつけられなくなった、そういう青年もおりました。

それから稲作の協力に行った人が、これは三人でチームを組んで、ルソン島の国道沿いのところへ州が持っている土地を与えられてそこでいわば模範水田を作ってくれという依頼だったわけですね。そしてその土地に行ってみたら国道沿いの空地で、もう石ころだらけ。荒れ地ですよ。それで彼らは初め文句を言ったらしいのですけど、どうにもならないので、あきらめてそこで石拾いから始めまして、開墾して石拾いをして、その拾った石がトラック六台。一口にトラック六台と言いますけど、手でもって三人でそれだけの石を出したということはたいへんなことですね。そしてそこにトマトを植えて水田を作って、私はその水田ができた年に行ったのですが、立派にできておりました。フィリピン人が、あんなに働けば、それはできるのはあたりまえだろうというようなことを言ってひやかしていたと言って、笑っていましたけれどね。しかしだんだんフィリピン人も水田の中から石ころを拾い雑草をとるような、そういう集約農業にだんだん変わりつつあるわけです。ある意味では突破口を開いたのかもしれない。

そういう日本人青年の話が広い世界のあちこちにあるわけですね。そういう話しをしていると切りがないです。おとといホンジュラスに行ったときも、「僕くの花畑、見て下さい。」という若い青年がいるのですね、日本人の青年です。それで「どうしたんだ。」と言ったら、このホンジュラスの首府はテグシガルパという町なのですけれども、「テグシガルパの人たちが結婚とか何とかで生花を買うとき、なまの花はホンジュラスでできない。そこでメキシコやアメリカ合衆国から飛行機で持ってきたやつが、それが非常に高いんです。それでぼくは花作りというか、園芸が専門だから、花を作って、テグシガルパの町に売りに来させようと思って、いま山の中に花を作っているんです。」と言うのですね。それで「じゃあ行くよ。」と言って彼のジープに乗っけてもらったら、いやあ、テグシガルパ自身がもう山の合い間にある町なのですけれども、そこからジープでもって、山を越え谷をわたって行くわけですよ。全然舗装がないものだから、もう三時間ぐらいしますとおなかがもうひっくり返るようになっちゃうのです。それをベルトできちんとしめまして、ジープで行くこと約六時間。それでその山間の空地に彼が花を作っておりまして、これができるようになったら村人にも花をつくらせてテグシガルパに売るんだと言っておりましたが、私が行ったのちに花が咲いて売って、たいへん成功したということを聞いております。

私が与えられた時間はもうあと一〇分ぐらいしかございませんので、結論に入らせていただきます。いま世界の貿易の一割を、このたった一億一、〇〇〇万の日本が占めております。つまりそれほどわれわれは外国に依存して生きている。新聞に出てくるのはエネルギー源の話ばかりでございますけれども、そんなことはないのです。もうエネルギー源をはじめ食料、飼料の原料などあらゆるものが、外国との相互依存でもって供給され、そのお

かげでわれわれは生きている。だから一そう、そういう相互依存の仕組みのなかで日本人が積極的役割を担い外国の人たちと協力する場を持たなきゃいかん。ところが御承知のように今日の国際的相互依存の仕組みのなかで必らずしも恵まれていない貧しい国々が数多く世界の人口の三割は栄養不良だと言われています。そういう底辺で、外国の人たちと協力し得るのは、実はぼくを言わしめれば、若い人たちしかないんですね。

青年海外協力隊創立以来私は運営委員をしておりますけれども、東大出というのは三人くらいしかいない。そのうち一人はトラブルを起こして、途中で訴訟問題まで起こしていますし、そんなのだめなんです。青年海外協力隊の背骨をなしているのは、これは地方で自動車の修理工をしていたとか、会社でもエリートでなくて、普通の工場で職工さんをしているとか、そういう人たちが背骨をなしているのです。日本で果物栽培の技術といっても、そう特殊な技術ではない。しかしそれがフィリピンに行きますとたいへんな技術になる。スリランカの農村に行くと自動車の修理ができるというだけでもって、ありがたい、ぜひここにずっと住んでくれと、こういうふうになるのです。そういうことでございますし、先ほど申し上げたように、理数科がちょとできるというだけでもって、もう学校の先生として非常に歓迎される。そういうことでございます。エリートといわれる人たちより案外平凡な日本人のほうが環境の変化に強いんですね。

さて、そういう風にボランティアとして若い日本人が外国に行ったときに一番大事なことは何でしょうか。それは人柄ですよ、人柄が一番大事です。その次が腕です。手に何か職を持っていなければだめですよ。それから三番目がことばです。だからヒト、ウデ、コトバという順番なんですね。はじめは、できなくたっていい。若い人というのは語学の天才ですから村に入って半年もたってごらんなさい、スリランカに行けばシンハリ語を覚えますよ。ルソン島の北のほうに行けば、イロカノ語を覚えますよ。ルソンの南のほうだったらタガログ語覚えます。タンザニアに行けばスワヒリ語を覚えるのですよ。インドネシアに行けばインドネシア語を覚える。英語なんかいらないのです。語学の才能なんていうのは、あれは教室の中のことで、村に行けばいやでも覚えますよ。人柄さえ良ければ、腕があれば、語学はもう三番目で結構ということでございます。これは新たな意味の海外雄飛ですね。明治人の抱いた海外雄飛のロマンティシズムとは違い、底辺のほんとに平凡な村人や町の労働者たちと一緒に暮らすような、そういう新しい意味の海外雄飛であります。そしてそれを育てる、かき立てるロマンティシズム、そういったものが私はこれからの日本の、ある意味では、たいへん強い活力になるじゃないかと期待しております。

それでその活力を実は阻害しているものが二つあるのです。一つはこれは官僚主義ですよ。青年海外協力隊なんかも、これは政府が所管しているために、ともすれば官僚的になっていけません。それは非常に悪いです。ボランティアで海外へ行くということは一つの運動なんですね。自分の決心でもって、自分で志を立てて行く。自分で責任を持つんですよ。そこで病気をしたら運が悪かったと思って帰ってこなきゃいかんし、病気しないように努力しなきゃいかん。何もかも政府に依存するのはまちがい。ちょっと挫折するとすぐ人にたよるとかいうのはだめなんです。場合によれば野たれ死にしなきゃならんかもしれんのがボランティアなのです。だからそれを官僚的な処理の仕方をされたらとてもかなわない。新しい国民運動だというふうに考えてほしいのですが、その意味ではどうも日本の政府はうまくないです。ともすればそういうものを官僚のコントロールのもとに置こうとする、これは良くないです。

それから第二は皆様方にかかわる問題でございますが、こういうふうなボランティアで行こうという連中がずいぶんいるんですけれども、現在日本で就職しているところが行かせないんですよ。人柄が良くて腕があればある程「おまえは会社にとって大切な人間だ。行かんでくれ。どうしても行くならやめて行け」と、こう言うのですよ。そんなこと言わないで、「二年間行きたいのか、二年たったならばまた帰ってこいよ、おまえまた雇ってやるぞ。」と、こう言ってくだされば いいんですよ。二年間外国へ行っていたら人柄が変わります。もっと良くなるのですよ。そして苦労してきますから、企業にとっても損でないはずなのです、長い目で見れば。ところが経営者というのは、日本の企業者というのはエコノミックアニマルで、短期的な金もうけのことばかり考えているとみえて、そういうふうに長い目で見て下さって行ってこいやと言ってくれる企業は数えるほどしかないのです。だから是非皆様方も、長期的に見ればその企業にとってプラスになるということを考えていただきたい。

私は国際関係の講座を担当しておりますので、三年、四年の学生に向かって、「おまえら、夏休みに船でもって南の国々に行ってこい。」と言うのです。インドネシアに行く、インドに行く、バングラデッシュに行く。ダッカやボンベイで、極貧とはこういうものかという経験をして帰ってくる。そうすると世界観が変わってくるのですよ。あの高慢ちきな東大生がちっとも高慢でなくなる。利己主義者でなくなります。おれは大蔵省に入ろうと思ったけれども、やめて労働省に入ろうかと。少しでも人様の為になる仕事をしようという気になります。さらに思いつめると北海道家庭学校に行って一年いや一生ボランティアとして過ごそうか、とか、スリランカで一生農業をやろうとかそういうふうに迷いはじめます。だから若いときの経験というのは人柄を変えるのです。ぜひそういう意味で若い人たちのロマンティシズムを生かしてやってほしい。会社として惜しい人であればある程生かしてやってほしい。

いま大企業の丸紅だとか三菱商事だとかいうのは、将来会社の幹部になると思う連中を、二年も三年も外国で教育を受けさせますよ、ビジネススクールに派遣して。それとおんなじですよ。ぜひとつそういう立場から長期的にみて、企業の立場から見ても利益だし、日本の社会全体から見ても利益だしということで、視野の狭い役人たちを説得し、そしてボランティアとして出してやってほしいのです。このようなボランティア団体は民間でも少なくありません。たとえばオイスカ（OISKA）は、これは農業関係では東南アジアのどこへ行っても、もう評価は定着していますよ。皆さん、オイスカなんて御存じない方が多いかもしれないですけど、フィリピンに行ってごらんなさい、台湾に行ってごらんなさい、いまはなくなりましたけれど、南ベトナムに行ってごらんなさい、バングラディシュに行ってごらんなさい。オイスカというと、これはもう農業では大変な評判です。定評があります。

それから岩村昇先生で有名になった、日本キリスト教海外医療協力会も、たいへんな仕事をしている。お金がないから大規模にできないのでごく少数のボランティアを出しているだけですが。それから青年海外協力隊、これは政府のお金でやるんでございますので、ずいぶん民間に比べれば官僚的だし、どうもぐあいが悪いと思う点が多いのですけど、それでもすらも高い評価を受けている。こういった組織に参加して海外にボランティアで出て行き、そのため視野も広くなり、そして人柄が変わってきて、それで再びその企業に戻るならば、これは大変いいことじゃないかと思いますがいかがでしょう。

そういうことを考えておりますので、企業とか地方自治体とかは、これはと思う人をどんどん海外ボランティアに出したらどうですか。これが私の今日の結論でございまして、

私自身も東大の国際関係論に来るような青年は、外国で国際的に活躍しようと志す学生なんだから、高等学校を出てから大学に入るまでに二年間海外ボランティアをやって、そして初めて国際関係論に入ってくれればいいと、そういうふうに主張しております。とても実現しないことでさいの河原の石積みかもしれないけれど、いずれは変わるかもしれないからと思って、私はそれを言い続けているわけでございます。御清聴、感謝いたします。

〈シンポジウム〉

「伸ばそう若い力 ― 明日を担う働く青少年 ―」

司会者	昭和女子大学講師	加藤地三
講師	社団法人勤労厚生協会専務理事	宮川貞善
講師	日本産業カウンセリングセンター理事長	野原春子
講師	松本市勤労青少年ホーム館長	迫正栄
講師	東京都武蔵野青年の家（東京都教育委員会社会教育主事補）	西村美東士

（社）勤労厚生協会専務理事　宮　川　貴　善

1. 勤労青少年の生態をどのようにとらえるか

悲観的にとらえるか？（若者への不信）

楽観的にとらえるか？（若者への信頼）

2. 野性味・活力を失いつつある傾向をどう見るか

意欲に欠けるあきらめ人間

自己中心のカプセル人間

3. 若い力をどのように伸ばそうとするか

若者たちの潜在的悩みは生きることの意義、人生観がつかめないことにある

4. 若い力を伸ばすための大人たちの熱意と実践

不安定な青春の中で愛情に飢える若者

若者とのつきあい。愛情と根気。若者の心をつかむ

5. 乏しい私の体験をとおしての若者像

寮における集団生活と若者の活性化

JYC活動で伸びる若者

仲間づくり、友情をとおしての人間形成

ボランティアとリーダーシップ

豊かな人生をきずくための人間改造、精神面の追求

恩義を知る人間、おもいやりのある人間形成

日本産業カウンセリング
センター理事長　野　原　蓉　子

1. はじめに（大企業、中小企業の出前カウンセラーとして）

2. 働く青少年の悩みの具体例から

(1) キャバレー通いで多額の借金をした

中卒A君の学歴コンプレックス

(2) 暴走族との不純異性交遊をくり返す

女子寮生B子さんの涙

(3) 対人恐怖から精神障害を起こした高卒K君の訴え

(4) 電話交換手Y子さんの声が出なくなった悩みの背景

3. 指導者の青少年に対する見方・考え方・対応法の間違い点

――心が通じ合えないための悲劇――

4. 青少年指導者として

(1) こうするものだ式（お手本教育）→なぜか式（問題的教育）へ

（相手にわかることばで話してやれるか）

(2) しつけ指導内容の拡大の必要性

（新しいものに立ち向かう意欲づくり）

(3) 相手の問題を発見してやることがカウンセリングの決め手

(4) 共感することは困難だが、共感的理解は可能だ

5. リーダー養成こそ緊急課題である

（〝目ざす先輩とは、うちとけて助け会える人だ〟と若者はいう）

松本市勤労青少年ホーム館長　道　正　　栄

ホーム運営方針「活動状況」から

1. 若者の自主性、創造性の高揚

(1) ホーム利用者の会が運営の柱

(2) 利用者の連帯感培養

(3) 活動の拡充

(4) 利用者と職員

(5) ホームのＰＲ

2. ホーム事業運営計画

3. ホーム今後の課題

東京都武蔵野青年の家
（東京都教育委員会社会教育主事補）　西　村　美東士

1.　ディスコを３年やってみて……

(1)　ディスコについて

「踊りが大好きな人たちがホントに踊りを楽しむ場所であってほしい。ディスコは体育館みたいなもんです。」

「青年の家でやるディスコは、わからない時、きがるに教えてもらったりできるから楽しい。」

(2)　ふれあい

「いっしょうけんめいやっている仲間に感動した。」「自分を覚えていてくれた。」「いわゆる『青年のつどい』のようなものに対する偏見をなくしてくれた。」「若者が一つになって何かをやったという感じ。」「未知の人に対して心が開けるようになった。」

(3)　実行委員の成長

ヒトやモノゴトとの出会い

ウラカタさんの葛藤 ― 「めだちたい」「自分も踊りたい」「ディスコボーイ」が３年目にしてステップ指導をした!!

2.　「青年」について

(1)　やさしさ ― 基本的には肯定的に考えられるが……

「大学生のお誕生日会」「暴走族のミーティング」他人にたちいってこない「やさしさ」

(2)　活動面での弱さ（例えば婦人の活動と比べて）

生活課題が見えない地域の課題とむすびつかない

(3)　青年期の独自の課題がありそうだ

「二次会」専門会員

労働？　結婚？　友人？　生きがい？

3.　「伸ばす」という意味

落書「対策」

自己教育と環境醸成……「対策」から「サービス」へ

なおかつ、「教育的指導性」とは何か

○「専門的技術的な助言と指導」の大切さ

○必要最低限に、意識して、徹底的にしかし中途半端に

加藤（司会）　ただいま御紹介にあずかりました司会の加藤でございます。

毎年日経ホールにまいりまして、このシンポジウムの司会を務めさせていただく光栄に浴しているわけでございます。今年のテーマは「伸ばそう若い力―明日を担う働く青少年―」ですが、昨年は「勤労青少年は何を考えているか」、一昨年の五三年度は「勤労青少年の現況と指導者の役割」というテーマでありました。毎年テーマは違いますが、その底にあるのはできるかぎり若い人たちの力を最大限に伸ばして上げようというのが基本にあって、それぞれの指導者の役割とか、勤労青少年は何を考えているのかというような年度のテーマになったのではないかと思います。

ところで今年、五五年は、勤労青少年福祉法制定後一〇年たっており、また八〇年代の最初の年でもあるということから、積極的に働く若者の力を伸ばすため、今年のシンポジウムのテーマとして取り上げたものと私は理解いたしています。

ところで皆様方は働く若者たちの力を伸ばしてやるためには一体どうすればいいのかと、日々職場で、またホームで、あるいはその他の施設でその方策の実践推進に努力なさっていらっしゃると思います。その場合に、このシンポジウムで毎年問題になりますことは、若者を指導する際に、人生の先輩である大人たちが、強い指導力を持って若者たちに臨むのがいいか、あるいはおれについて来いというような強い指導力の下では、若者の主体性、自主性が損われるから、若者の主体性が育つまではじっくり待ってやり、若者たちの自主性が育つ条件を作ってやることが指導者の役割だという見方もございます。これはどちらがいいか悪いかの問題ではなくて、みなそれぞれの長い人生経験、あるいは職場経験からそういう論議が生じたのだと思います。

今日のシンポジウムでも若い力を伸ばすためにはどうすればいいかという場合に、勤労青少年をどういう観点でとらえるのか、あるいは、勤労青少年はいま何を考えているのだろうかという理解から始まって、それを伸ばすためにはどういう方法がいいのかというお話が諸先生方から出るのではないかと思われます。

最近の朝日新聞の「声」欄に、東京都の一八歳の浪人が、「同世代の若者たちよ、いい加減で道路で踊ったり、深夜バイクで走ったりするようなことは止めようではないか。」という提案をし、われわれはもうすこし世界に目を向けるべきではないか、いまの日本の青年は平和な世の中に甘えすぎているのではないか、甘えているからこそ原宿で踊ったり、あるいは道路を騒音を出して走ったりするので、もうそういうことは止めて、もっと冷静にこれからの時代を担う青年として地道に生きようではないかという投書が載っていました。こういう考えの若者がたくさん現在いるわけです。

問題になるような非行をする少年というのは一部の者だとは思いますが、去年のシンポジウムの記念講演をなさった慶応大学医学部の小此木さんが、モラトリアム人間というお話をなさいました。簡じて言えばいまの若者は大学生だけではなく、高校を出た人も、あるいは高校生諸君もこの朝日新聞の「声」の投書にあったように、いまの社会に甘えているような感じがある、つまりモラトリアム人間になっているというような見方ができるのではないかと思います。そういう見方も踏まえて今日のシンポジウムを運んでいきたいと思います。

シンポジウムの流れを簡単に申し上げますと、各講師から、向かって左側の宮川さんから始めるわけですが、最初に七、八分ぐらいずつお話を願った後で、補足の御意見を二、三分ぐらいずつお伺いしたいと思います。もしその後、時間があれば各講師の先生方の間で、意見交換とか質疑を交わしていただき、その後五分間休憩して、一時間半ぐらい時間をとって、皆様方と私ども講師との間で質疑とか、意見の交換の時間にいたしたいと思います。よろしく御協力をお願いいたします。

それでは勤労厚生協会専務理事の宮川さんからお話をお願いいたします。

（各講師の意見発表）

宮川（講師）　御紹介いただきました宮川と申します。勤労厚生協会という団体は何をやっている団体なのかという疑問をお持ちかと思いますので、ごくかいつまんで申し上げたいと思います。

勤労厚生協会のほうで、もっとも力を入れておりますのは、企業の独身寮に生活しております寮生諸君のリーダーの養成です。寮生活の中で仲間意識を育てると同時に、お互い同志の思いやり、そういうものからの友情や余暇の健全活動、自主的な寮活動、寮の行事、企画というようないろいろなものを通してリーダーシップを育て上げていこうということであります。このリーダーシップの育成企画の実施はすでに一四〇回にも達しておりまして、二泊三日、三泊四日の研修に参加してくれました修了生は約一万を超えています。さらには海外研修の船旅、あるいは海外研修ということで、ソ連にも三回ほどまいりました。ナホトカからハバロフスクへの夜行列車の中で若者と語り合った思い出、あの広い平原など若者との心の結び付きと同時に大変印象が深く、このような機会にいろいろなところで若者と触れ合って来ています。

また寮の管理をなさる方々に対しては、寮の管理運営に関する研修を行っています。これは寮管理士講座といって労働省の御指導に従い、その方たちには福祉推進者講習も兼ねて行っています。

いま申し上げましたような海外の旅、あるいは国内の旅、あるいは研修で触れあった若者たちとの一つのそういうものをなんとか自主的なサークル活動に育て上げていこうというようなことで「ジャパン　ヤング　サークル」を作って会長としてやっております。

そのような機会に、若い人たちの中でやはり異性との結び付きができ、結婚をしようという話も出てまいりますし、その中にはトラブルのある青年もおります。そういう人達がうまく結びつき結婚の仲人をしてやったのももう三〇組になっておりまして、この人たちは時々家へもやってまいり、毎年子連れサークルの集いというようなものを行って、交流を続けております。ですから私は二〇才前後から付き合っていた若者たちが結婚して、三〇になり、三〇をこえ、子供が一人、二人になるというところをずっと追い掛けながら彼らが人生を立派に育っていってもらいたいという願いをもって若者と接しているというのが私の身上でございます。

それではレジメにそってお話をしたいと思いますが、時間がありませんのでかいつまんでお話をしたいと思います。

私は近頃の若い人たちには面白味がなくなってきた、野性味がなくなってきた、ある意味においてはズッコクの精神がなくなってきたと思います。研修に来る若者を見ておりましても、やはり総体的におとなしいようです。小型紳士になってきているという感じを非常に強く持ちます。こういう若い人たちを本当にたくましく伸ばして行くということは、なかなか難しいことなのだなということをしみじみ感じております。

そこで私はいまの若い人たちにもっとも欠けていることは、私のような年配者から見て、遊び上手になってはいますが、バックボーンとしての精神的なものが持たれていないというところに一番の問題があると思います。次に若者との触れあいの場所ですが、私は国立オリンピック青少年センターの中に在居団体として事務所を持っており、ここにはたくさんの青少年がやってきます。また愛知県、滋賀県などの青少年の研修施設を使わせてもらいますが、こういうところでは大変時間の制限がありまして、若者と本音で話し合いの機会が与えられないのです。やはり若い人たちと本当に付き合うためには、夜の時間などは制限しないで、（いつでもそういうわけにはまいりませんが）酒を汲み交わしながら話し合っていくということにおいて、本当に若者との真の心の触れあいができる。そういう中から若者は自ずと私の気持なり、大人の気持なり、考え方を知るなど互いの触れあいを通して次第に伸びていくのではないかと考えております。そんな考え方から私は自宅の一部を若い連中に開放してあります。これを若者

たちはＪＹＣサロンと呼んでおります。このあいだ二〇人ばかり集めて、一度若い人たちと一杯やらなければならないというようなことを家内に話しました。家内は三日ぐらい前からおでんなどを用意していました。当日、その中の一人の青年が、「これで先生一応閉じましょう。皆さん正座をして下さい。そして左手を出して、右手を出して下さい。手を合わせて下さい。本日はまことに楽しい夕べで先生ありがとうございました。そこでこれから先生の講話を伺いましょう。」というのです。いまさら一二時を過ぎて講話もないだろうと思ったのですが、一〇分ばかり話をしました。それで、あとで電話をかけて、「なかなか最後はよかったよ。」と言ってやりました。私は私自身彼らに恩義を求めているわけではありませんが、いまの若い人たちの根本的な問題は指導をしてくれる人、学校の教師にしろ、両親に対してもどうかという感じがするのです。その大人の行為に対して恩義を感じていくとか、何かそれに対して恩返しをしていこうというような気持ちに欠けている。とりあえず先生にでも御恩を返さなくてはいけない、また感謝の気持を持たなくてはならないということを、私がモデルとなってもいいからそういうものを培ってもらいたいという希望からＪＹＣサロンに落書帳というノートを下げてあります。これは青少年が各自でフリーに書きますので、本音が出ています。この落書帳をできたらのちほどの時間で、若者たちはこんな気持を持っているのだというようなことを見てほしいと思います。そういう物を見ますと、若者たちは人間性を持ちながら伸びて行っているなという喜びを感ずることができます。たいした仕事ではありませんが、そういう青年を眺めながら、これが私の余生を若者に捧げていこうというような気持にさせてくれる、元気で生きているのも若者のおかげなんだなという気持で、若者にも感謝しながら生きているというようなところです。

この辺で第一回を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

加藤　宮川さんがお持ちの落書帳の中に青年がどういう本音を書いているかということはちょっと知りたいと思うのですが、それはあとの時間に譲っていただきます。それでは次は野原容子さんにお願いします。

野原（講師）　野原です。私は一〇数年まえは中学とか高校の教師をしておりまして、その後に卒業した若者たちがいろいろなことを相談に来て、その相談に応じているうちにカウンセラーという仕事に入っていきました。

会場に埼玉県の方もお見えかと思いますが、川口という所はいまは鋳物の町からマンションの町に変わったようですが、鋳物の町、まさに中小企業の町で私は、カウンセラーとしてスタートを切りました。今年の夏は大変涼しい夏でしたが、夏の熱い日の作業は塩をなめなければ汗でどうしようもなく、塩をなめながら働いている若者とか、または鋳物の砂で汚れてデートにいくにしても落ちないけれどもどうしたらいいかと聞く若者、このような砂がもうすこしきれいな色ならいいなとかいうようなことを考えながら始めました。

その当時はすさまじい離転職の時期で、その中で地方から出て来た若い人が、「この会社はなんだか自分で選んで、自分で決めちゃった。」自分で決めたということでどのくらい耐えられるかというような事例もあります。相当にこの工場が苦しくなり、若い人からどんどん辞めていったわけですが、そういう時にも辞めないで、がんばる、いまこれだけ弱いと言われる若者ががんばる時というのは、「自分でこの会社を選んだ」という時、どのくらい強いのかということを肩で感じたことがあります。

さて、最近の若い人の悩みの具体例というものをすこし挙げさせていただきたいと思います。レジメに書いておきましたが、まずキャバレー通いで多額の借金をしたＡ君の場合ですが、中学卒業後、中小企業の資材課で五年ぐらい働き、現在は営業課に変わりました。大変明るくて努力家の若者でした。しかし課の慰安会の後の二次会でキャバレーに行って以来病みつきとなり、ともかく一〇〇万円以上の大金を使い、車は売る、会社や親たちか

らも借金をするというようになり、上役や周囲の人たちの態度は以前とがらっと変わり、営業などでお金を預けるのはとんでもないとか、全く自分のことを信用してもらえなくなって笑っているというのです。そういうようなことでいまは会社を辞めて、わずかでも退職金を貰って、会社の借金だけでも早く返したいと思うがどうだろうか、というような相談を受けたわけです。いま彼らはガールフレンドはいくらでもいるわけです。そういう言い方は非常に偏見があるかもしれませんが、なぜキャバレーなどにという気がするのです。なぜそれほどに多額のお金を使って遊びほうけてしまったのかという原因ですが、彼は営業課に変わってから計算ミスとか、読みにくい字とか、話好きであった彼がお客相手だとうまくいかないとか、そういうこととちょうど同じ時期に大変好きであったガールフレンドは高卒で彼は中卒でした。そのガールフレンドが離れていくというようなことも重って、彼はそれまでは非常に順調に来たわけですが、学歴コンプレックスを感じてしまったわけです。現在は高卒の人も高学歴化社会ということで学歴コンプレックスということを非常に言って来る時代ですが、彼は中卒で定時制高校にも行きませんでした。しかし彼はそれなりに明るく生きて来たのです。ところがことで配転後非常につまずきがあったわけです。その折にキャバレーの女性の親切は、商売上の親切とわかっていても馬鹿にせずに接してくれたということは涙が出るほどうれしかったと言っているわけです。

この多額の借金によって彼は車も売らなければならず大変だったわけですが、すこしも後悔していないわけです。自分は若いからお金はいつでも返せるけれども、自分がやる気を失ってやけになっていた時を元気づけてくれたというのは本当にありがたかったと言うのです。その点において彼は本当に後悔していないと断言すると言っていました。

そういう時に暴力団のようなところから誘われたけれども、そういうところに入りもせずに済んだ、自分にとってはとても良かった、なのに周りの人たちはその一回のトラブルで自分をこれだけ偏見で見るというのです。

あれは駄目な人間だというレッテルを貼られるという、彼にとっては大変つらい思いをしているわけです。そのようなケースがありました。

次に同じような例ですが、暴走族と付き合い、不純異性交遊を繰り返す女子寮生の場合です。紡績工場で働きながら企業内高校に行っている女子のケースです。御存じのように非常にわずかな人数になりましたが、いまも企業では先生方を雇い、寮生活をともにし、教科を指導するより生活指導に先生方が悩み、ともかくその中で高校を卒業させてやろうということで、私たちはその先生方の真剣な姿は大変勉強になるわけです。そこの寮生で一七才になるK子さんの場合です。

彼女は同じ年頃の女性たちは普通の高校に通い、さらに短大、大学と通うのに比較して自分や一五・一六歳で働きながら勉強をしているのはとても格好も悪いし、みじめだという気持を持っていました。寮の先生方に外で会った時はなるべく声を掛けないでくれと言っていました。外であったら友だちには普通の高校生だと言っているわけです。本当は働きながら勉強しているわけですからもっと自慢をしてもいいわけですが、先生方に声を掛けられたくないから知らん顔をしてくれと頼んだりする非常にプライドを持っているわけです。そういう意味で、彼女たちが、全部を打ち明けられるのは暴走族の人たちであり、また、本当にわかってくれるというのです。同じようなところで自分たちの存在価値というものを喪失した経験を持っている人たちなわけです。

爆音を立てて工場の外に来るのです。彼女たちは嬉々として出かけて行くわけです。そして化粧、服装、態度までが彼らと付き合うということで、ある意味の悪い点がたくさん出て来て、早くも仕事と勉強の両立などということは不可能になり、会社を辞めて行くというようなケースが多いわけです。このケースのK子さんという女性は外泊が多くて、カウンセリングの依頼を受けて相談相手になっ

たわけです。この最後に「B子さんの涙」と書いたのですが、彼女の友だちが妊娠して、相手の男は全然わからないわけです。それで産婦人科にB子さんが同行しましたところ、医者は妊娠四か月だと言うのです。妊娠三か月以内でなければ大変体に害があるのに、生理がなくなっていても差し迫った感じも持たず、誰にも頼ろうとしないという女性が増えて大変困っているのですが、この人の場合も妊娠四か月をこえていて、なぜかお医者さんは「おめでとう。」とこの友だちに対して言ったそうなのです。そうしたらこの友だちは泣くというようなことは考えられない女性だったわけですが、この妊娠をしている女性は、「おめでとう。」と言われたと同時に泣いたそうです。これを見てびっくりしたこのB子さんもまた本当に可哀想で泣いたそうです。そこで二人でさんざん泣いたあと、どういう話し合いの下に中絶手術を行ったかわかりませんが、手術をしたそうです。

B子さんという人は不特定多数の男性とセックスの関係を持ち、まだ一七才になったかならないかなのに、異性関係なしには暮せないというような言い方をしているわけです。大変に問題のある女子社員だと思われるかもしれませんが、私たちと同じではないかという面が、話を聞いてみるとあるわけです。つまり私たちが自分自身を理解してほしいと希い、本当の触れあいとか、交流を求めていろいろな人と話そうとします。私たちもストレスがたくさんあります。そうしますと失望したり、期待が大きいだけ人に出会って失望というものが強いのです。彼女たち、彼らも本当の意味での人間関係を求めて話すということがなかなかできず、セックスというほうに行っているわけです。当然手段がまずいわけですが、彼女たちにとって不特定多数の男子と交わるということは切に人間関係を求めては、また裏切られ、結果は決まっているわけですから、一層空虚なものを感ずるわけです。こういうことでプライドを持てないでいるなかで、わかってくれるのは暴走族の彼らだけなのだと訴えていました。そして「おめでとう。」と言われたら泣いたというのです。すぐ手術をしなければならない子供なわけですが、そこで泣いた二人ということです。全く同じ土台に乗れるわけです。見かけとか、やっていることによって大変な子たちだと思っていたけれども、話を聞いていると同じ土台に乗れるのだなということを痛切に感じた事例でした。

加藤　もっと話を聞いていたいような気持がします。働く青少年たちが孤独で、本当になんでも打ち明けられる友だちを痛切に求めているのだということがよくわかりました。それでは次に松本市勤労青少年ホーム館長の道生さんお願いいたします。

道正（講師）道正です。日ごろホームの運営に全国四六〇余の仲間の皆さんとともに、激動の社会に不安におののく若者たちのよき助言者になろうとして、またホームに寄せられる大きな期待を痛感しながら取り組んでいる一員でございます。

現代の若者は無気力で弱々しいと嘆く声が聞かれるこの頃ですが、私はホームの活動の中からそれぞれ決められた役割分担をきちんと整理して、前向きに行動している若者をたくさん見ております。この若者たちが職場においても、地域においても、身近な友人関係においても健全な社会人として十分に力を発揮してくれることを信じております。このようにホームは山積する勤労青少年の問題解決のために、若者の持っている自主性、創造性を培養する場です。重大な使命を帯びているわけで、その立場から発表させていただきたいと思います。

はじめに、ホームの現況ですが、長野県の佐久中心です。人口一八万九〇〇〇余で、周囲を山で囲まれた盆地、俗称松本盆地と言い、商業を中心とした中都市です。ホームの規模は、六九〇平方メートルです。体育館は八一平方メートルの施設で、現在ではちょっと小さいかと思われます。五四年度におけるホームの利用状況を、先ごろ労働省より発表がありましたが、五四年度の全国四〇三のホームを集計した資料と、私どものホームとを比較し、登録入員を一館あたりで見ますと、全国

では四六〇人に対し、私のホームは一、〇一八人です。年間平均の利用延人員は全国が一七、三〇九人に対し二〇、四一七人です。月平均の延人員は、一、四四二人に対して一、七〇一人です。一日あたりの利用者数は五八人に対し六八人です。全国平均より若干上回っているのが現在の利用実績です。

特に松本ホームの特色はホームが開館して満七年になりますが、勤務する五名の職員と、当初から利用する若者たちが自主性を発揮して、運営方法がホームと一体となってやっているというのが特色ではないかと思うわけです。

内容についてこれからお話するわけですが、ホーム利用者の会ということで、その経過を申し上げます。四八年五月にホームがオープンして、二年をかけてホームのあり方をどのように持って行くべきか、単に技術の修得の場、あるいは教養講座の憩いの場だけで終わらせることなく、どのようなホームにすればよいのか、職員と利用者と二年間あちこち視察して作り上げたのが利用者の会です。ホームは若者にとって自分たちが主人公である、いきいきと活動するにはそういう場面を作らなければならない。自分たちの施設として生かすには、そして働くヤングの城として定着するにはどのように持って行くかということが自主的にホームの事業、運営に参加することであるという理解を得て、その内容を規約に盛りこみ、ホーム登録者全員が構成するホーム利用者の会が五〇年七月に発足を見たのです。以来規約にある会長以下役員四〇数名の構成によって委員会、部会に分かれてホームの事業の計画を立案し、実施しています。

ホームの行事についても一般参加の呼びかけ、ホーム便りである機関誌の編集、発行、自分たちで作った簡単な軽食堂、あるいは喫茶コーナーの運営も自主的にやっています。

会の中身ですが、総会が五月に一度あり、ホームと利用者との協議を得られた年間事業がここで決定されるわけです。大部分が利用者の希望が入っているのが実状です。委員会については月一回の定例会があり、委員には各サークルの一名と、一般利用者の代表者からなっています。部会において行事の計画実施を求めながら促進し、クラブ　サークルの利用の調整をここで決定します。

例えば一月間のバスケット部の使用は何曜日の何時からという形で決定します。部会は事業分担が三部に分かれておりまして、それぞれに担当がおり、文化・音楽関係、体育・リクリエーション関係、ボランティアの関係、リーダー研修会というように分担しています。実際の行事については役員だけではいけませんので、各サークルが下見について行きます。相互協力しながら事業の消化をしていくというのが部会です。職員はいらないような感じになりますが、自主活動ですので、各部会の担当者になっており、そこで助言から指導にあたりながら部会の援助をして、自主運営に力を入れています。このようにしてホームの基礎作りに努めているのが過去の経験と欲求を踏まえてということになります。

ホームでは利用者の自主性、創造性をさらに高めるために、登録者全員で構成する利用者の会の活動を援助しながらホームの運営の柱となっています。この利用者の積極的な活動に対して、私どもとしても、勤労青少年育成事業補助金ということで、この会に三五万円支出をしております。利用者の会もまた独自に各事業の収入をあげ、年一五四万円の予算を独自に持って運営をしています。これがそこで大きく申し上げてありますす若者の自主性、創造性の高揚と、ホーム利用者の会が運営の柱であるわけです。若者たちが持っている行動力をホーム活動の中から働く青少年がその若い力を十分に伸ばしえる真の展開の場として、ホームは助言、援助をしながら健全な職業人、社会人としての育成を期待しているところがホームです。若者たちの可能性を信じるところでもあります。以下に活動など重点目標を挙げてありますが、次回で述べさせていただきたいと思います。

加藤　若い力を伸ばすために作られている施設が勤労青少年ホームですが、そのホーム館長のお立場からホーム利用者の会についてお話がございました。

次は西村さんです。西村さんは労働省が作りました勤労青少年指導者大学講座の第一回の修了生です。本日も第五回の講座に席をおく青年たちが受付その他でがんばっておりますが、第一回の大先輩です。西村君よろしくお願いします。

西村（講師）　今日わ。いま東京に七つ青年の家が都立としてありますが、そのうちの一つの武蔵野青年の家というところに社会教育主事、つまり指導職員として勤めております西村美東士です。よろしくお願いします。学講座を卒業してからまだ四年目でまだひよっ子ですし、もう一つ社会関係の畑だということで、そういうことから間違ったことなど述べるかもしれないのですが、思い切ってこの場は自分の思っていることを率直に発表してみたいと思います。

レジメに書いたとおり、私は武蔵野青年の家に配属になり、三年間仕事をしてきました。

私たちの仕事は利用者への対応ということがあり、文化、スポーツ、リクリエーションなどいろいろな団体が来るわけで、それの条件整備のお手伝をすることが一つの仕事です。

もう一つは勤労青少年ホームの仕事とオーバーラップしてくるのですが、一人ぼっちの青年をなくそうということで、主催事業を行っております。そこで何をやろうかと考えた時に、青年の家というのは、私が思うに青年の家族というか、固定的に層ができていて、いわば優等生たちが相当来ているように思われます。それは素晴しいことなのですが、優等生でない部分も引っぱり込みたいということでディスコを主催事業として行うことを考えました。レジメには面白くディスコと書きましたが、実際にはレク・ダンス、フォーク・ダンスなども取り入れて行ったわけです。一年目は足の運び方、踊り方を教えているディスコがあるというので、そこからその人を呼んで来て、青年の家の体育館でディスコをやりました。

最初に先入観のようなものがあって、たとえばディスコとか、オートバイなどというと、それだけで不健全、退廃ととらえられる向きもあるかと思うのですが、自分が好きだからでしょうか、以外と健全で楽しいのです。オートバイではスピード感とか、カーブの曲り方の面白さ、ディスコの場合は思い切り汗をかいてみんなと一緒に踊れる良さがあるわけです。楽しいということはいいことだと思い、ディスコを青年の家の主催事業に取り入れていったわけです。結果は感想文としてレジメに書いておきましたが、「ディスコは体育館のようなものです。」と、スポーツの良さと結構一致する部分があるようです。普通民間のディスコにいくとうまい人は踊り続けます。しかし一人できた場合全然できなくて孤独感を味わっていくということが以外に多いのですが、青年の家ではみんなにまず一人が教えて、みんなで同じ足ぶみでやってみようという感じでやっています。それでもわからなければ実行委員に教えてもらうとか、そういう暖かい関係でやっているわけです。その中の一番の眼目というのは触れあいなわけで、ここにあるとおり、ある程度の効果は上がっていると思います。

そこで私がうれしかったことは青年の集いのようなものに対する偏見をなくしてくれたということです。青年の集いとか、若者の集いなどは勤労青少年ホームでもやられると思いますが、そういうことに積極的に飛び込む人と、それからそういうふうに指導されるのが嫌やだというような二面があると思うのです。そしてディスコということを媒介として、今迄青年の家など敬遠していた人たちが、互いに心のつながりを持ち、「青年の集いなどは嫌やだな。」といったような偏見をなくしてくれたこと、そういう点ではよかったと思います。

成長の部分ですが、教育の畑では発達とか、成長ということを気にするわけですが、やはり実行委員の成長が非常に大きかったのではないかと思います。人ともめぐり会えたし、物事ともめぐり合えたということです。

次に東方さんのかっ藤ということがあげられます。「目立ちたい、自分も踊りたい」ということですが、やはり受付をやっているよりはステップの指導をしたほうがいい、自分

も踊ってみたいというような中で職員としてはどうするかということは非常に悩んだことです。やはりある程度裏方をやらせる、目立ちたいという気持ちをなくして、参加者が楽しめるように裏方をやるための助言をするのがいいのか、それとも青年の目立ちたいというような気持をそのまま生かしてあげていいのか、その辺がちょっと難しいところだなと思いました。いずれにせよ、その中で実行委員一人一人が考えて、いろいろな考え方を持ちより、悩んだりして成長していったのではないかと思います。

ディスコについては最後ですが、一番収穫があったのは、一人のディスコボーイがいました。ディスコボーイというのは人には教えないし、音楽がかかったら急に前に出て来てかっこよく踊ることが生きがいなわけですが、その人が実行委員として三年間やる中で、三年目にしてやっとみんなの前でわからない人にステップの指導をしてくれたことでした。

今の青年は優しいということが言われていますが、まず肯定してよいのではないかと考えます。これはあるところで聞いたのですが、暴走族が思い切り走ってその途中で休憩をとります。休憩中どういうことを話しているかというと、実は何も喋っていないわけです。喋ったとしても表面的なことに終始しているようです。それは結局お互いにあまり自分の仕事のこととか、生立ちのことなどには踏み込まないようにしようではないかという意味での優しさがあるようですが、それを如何にして打ち破っていくかというところに問題があるようです。

あとは活動面での弱さということが挙げられます。婦人活動などに比べて、地域活動、生活課題などに対する取組みが弱いということです。ただ市民としての生活課題などを見る能力を身に付けさせていくということも必要なのですが、それと同時に青年期特有の生きがいにかかわるような部分の課題にも取り組んでいく必要があると思います。

それから最後に若い力を伸ばすということで、社会教育の分野では環境情勢ということをよく言うのですが、東京都の青少年問題協議会などでは、いまや青少年対策という言い方ではなくて、青少年サービスという形でとらえていく必要があるだろうと思います。それでいままでの青少年対策、健全育成というとらえ方を止めようではないかという提案が出ているわけです。自らが自らの力で伸びていく、それを専門職員は外側から援助していく必要があるのではないかということです。実際には自己教育が本質だと思うのですが、単にそれだけでは結局僕たちが公費をいただいて、働いている意味がないわけで、それでは一体僕たちはどういう役割なのだろうかということを考えるわけです。

一つは専門的、技術的な部分での助言指導ということです。先ほどカウンセラーの方からの発言もあったのですが、この頃こちらとして言われているのはやはりカウンセリングとしての機能、情報提供などを含めたカウンセリングとしての機能が必要ではないかと考えております。以上尻切れトンボになりましたが、よろしくお願いします。

加藤　西村さんは青年の家族というのがあって、青年の家に集まって来るのは一定の層でしかも模範青年のような人が集まって来る。そういう青年だけでは困るので、優等生以外の青年を集めるために、主催事業としてディスコをやり、一定の成果があったと思いますが、ホームにもやはりホーム族というのがあって、ホームに寄り付く人と、寄り付かない人があると思います。ホームとしては施設があってお客さんが来るのを待っていればいいと思いますが、ホーム族ばかりを対象にして活動を続けるのではなくて、ホームにいままで寄り付かなかった青年たちをどうすれば集めることができるか、むしろホームが積極的に地域や職場の青年の中に出かけて行く必要もあるのではないかと思われます。最近新聞に出ていましたが、都下の小平の警察署が署長以下暴走族の青年と野球の試合をして、すんで暴走族の青年と付合いをするというような行事をやりました。と同じように、ホームでもそういうところへ出かけていって、い

ままでホームと関係のない青年とお付合いをする必要があるのではないかということを西村さんの話を聞きながら感じていました。

それでは次に第二ラウンドに移りまして、各講師の先生方にだいたい三分ぐらい時間を差し上げますので、前回の発言の補足をしていただきたいと思います。

宮川（講師）　先ほどはどうも若干手前みそのような感じがしましたので、私はいまの青少年問題、暴走族など、いろいろな問題がありますが、基本的には愛情に飢えているということだと思います。

それは大人の愛と友情に飢えているということが社会不満の爆発につながると思います。ここに「おふくろ」という歌集があります。これは二葉でい子さんという方が私に手紙をくれ、大変下手な歌だけれども、寮生が歌を作ってくれたというのです。これは大変短い序文なので簡単に御紹介したいと思います。愛というものは本当に若者を打つものだと思います。前書を紹介したいと思います。これは富士電機製造株式会社というところなのですが、第三富士寮生谷邦雄、遠藤稔とあります。これはおそらく自治会の役員だと思います。

「野見山でい子には青春がある。野見山でい子にはぬくもりがあり、故郷のにおいがある。永い人生の中で不安と期待のもっとも大きいであろう寮生活。」

この歌集は苦楽を共にしてきた野見山さんと寮生との人生の一端である。退職、転勤、結婚と離れていった寮生がふと淋しくなったときやはり思い出されるのは懐しい寮生活ではなかろうか。その第三富士寮もいまはない。苦しいことのみ多い人生にこの歌集が素晴しい伴侶となることを信じてやまない。「野見山でい子は母親であり、おふくろであり、そして恋人である。」という文句です。ですから寮はなくなったけれども、彼らの心の中に寮母野見山でい子さんの愛情、それから青春の故郷として寮は残っていくのです。だから私は企業の寮というものは若い人たちの心の故郷にしていって下さいということを申し上げているのです。

一、二ここでメモした歌を申し上げてみます。

敬老の日だよ　母なき君はわれを背負いて
庭を歩みぬ

夜勤者が冷き飯を食みし朝　哀れと思いひとり涙ぐむ

失恋の果てぬかるみにのたうてる　友を座禅にわれは伴う

明日からは命がけで生きるのよと　気弱き子にさとす木枯

いつまでも子供と思いし寮生が女知りぬと聞けばとまどう

いろいろありますが、大変心温まる人間との触れ合いだろうと思います。

カプセル人間ということがありましたが、いまの若い人たちはとかく何かに閉じこもっていこうと、カプセルに閉じこもろうとしているのです。だから私はカプセル人間というのですが、第一番に求めるカプセルは何かというと車です。車というのは若者が非常に憧れるカプセルなのです。それでチンタラチンタラ、東名、名神を走りますと、それでガールフレンドもいれば最高のカプセルなのです。ですから寮にいても個室を求めます。一人でカプセル的な個室に入ってじっとしていたい。自己中心になりたい、なるべく人のためになるようなこととか、自分に得にならないことはやりたくないという傾向が通常見られます。そういうものをどうして打破していくかということが問題であろうと考えています。

ＪＹＣサロンの落書帳を見るとここに述べている気持ちは六四歳になる僕と同じ気持だと思うのです。「今日もなんとなく一日が過ぎ去っていく。特別に楽しかったということもない。特別に悲しかったということもない。なんの変哲もない一日が。これでいいのだろうか。こんなことでいいはずがない。何一つとして満足のいくことがない。怠け者の自分に腹が立つ。人間てなんでこんなに弱いのだろう。自分の心の中にいる敵一人だってやっつけられないんだから。自分に敗けちゃいけないと思いながら、いつも敗けそうになっている。強くなりたい。もっと強くなりたい。

せめて自分に敗けないくらいの強さを持ちたい。いま切実にそう思う。だれかさんのひとり言」やはり若者たちも一生懸命弱い自分にむち打って生きようとしているという感じがします。たった一つの新聞なのですが、そのもの自体にあまり意味がないと思うのですが、そういうものを作る若者が伸びていくとか、打ち込む若者が出て来るということにおきましては、意義のあることではないかと思っています。

「もうすぐ夜が明けようとしているころ、私はいまごろ新聞の編集にめどをつけて眠りについているはずだったのに、ちっともやろうという気が起こらない。なぜか空虚なものが頭の中を横切っていく。祭のあとの空しさなのだろうか。三日はチャモロ会の残留組がやって来た。四日は部長会、五日は新聞の編集委員が集まってひさびさのサロン。とても活気に溢れていた。大分の友も無事に到着とのこと。彼らの心情とバイタリティと行動には頭が下がる。ああ、大声を出して叫びたい心境になる。花の命は短くて苦しきことのみ多かりき。でも私は生きていく。人はなんのために生れ、なんのために生きるのか、それを考えるために生きているのだと言った人がいたけれど、考えれば考えるほど奥の深い、一生をかけても答を出しえない永遠の課題であるような気がする。でも私は生きている。たしかに私は生きている。同じ生きるなら自分らしく精いっぱい生きて行きたい。精いっぱい生きるということは考えていると結局またもとのところに戻ってしまう。いや、もとに戻ると考えるよりも、前進していくと思いたい。そう考えられる自分でありたい。」このようにして友達がやって来て、みんなが落ち合う。友また遠方から来たる楽しからずやと、そこで若者は元気を出して生きていこうとするのです。けなげな感じがします。

僕も若者のこういったロマン的なことが好きなのですが、「外に自転車が停る音がした。ピンの音がしないので多分新聞配達だろうと思うが、外に出てその疑問を明らかにする気力がない。時を刻む時計の音と、編集長の寝息の音、高速道路を走る車の音、早起の鶏のおじさまのクシャミ、どこかで啼く名も知らぬ鳥の声、このサロンでもこれだけの音が聞える。このボールペンが紙の上を走る音も、昨夜から第四九号の新聞の編集のために徹夜になろうとしている。夜も明けてきた。これから仕事である。日曜日なのに。自分で考えても馬鹿だなと思ったりする。でもがんばるぞ。人生って楽しいね。泣きたくなるほど楽しいよ。大波小波に揺られる木の葉のようだ。」僕はこの「人生って楽しいね。泣きたくなるほど楽しいよ。」という若者のこの言葉がジンと来るのです。私は若者たちはある一方においては本当にけなげに生きている。しかも私はこんな朝の風景なんて全然知らない。同じ家なのに私は朝寝坊なのです。この男はあとになってわかったのですが、電車の運転をやるのです。電車の運転をやる者がこんなことをしていて、電車を眠って運転されたらえらいことだと思って、あとからこれは考えなくてはならないと思いました。そういう点におきまして、私はいろいろな若者たちはさまざまな様相を呈しているけれども、大半の若者は一生懸命生きています。可愛いい若者だな、素直な若者だな、なんとかこれを伸ばしてやるにはわれわれ大人はいかなる行動といかなる愛情と、若者との触れ合いを持っていかなければならないかということを常々考えさせられます。以上で終わらせていただきたいと思います。

加藤　わかりました。次に野原さんお願いします。

野原（講師）　お手許のレジメには対人恐怖から精神障害を起こしたK君とか、電話交換手で、密室の中の人間関係がうまくいかなくなったら、交換台に入ると声が出なくなるという心因性反応というかヒステリー性反応を起こしたケースなどがあります。

若者たちというのは非常に精神面の病気なども後発する時期ですのでそういった事例もあります。そのほかに青少年指導者として、私のような者が感じたことについてすこし申し上げたいと思います。

先程ご埼玉県からスタートを切ったと言い

ましたが、いまでは各地の仕事をしています。特に中小企業などでは一人カウンセラーを雇うということは不可能ですので、短期であれ、一日であれ、一人の相談であれ、すぐ出前をするというやり方で私どもセンターは活動をしています。いくつかのことだけ簡単に申し上げますと、最近若い人に影響力や印象を与えられる指導者になるためにはどうしたらよいかということがあります。先輩が後輩に対して影響力を与えられないということが多いわけですが、その中でかつての〝こうするものだ〟式のお手本教育、つまりとれは常識だ、挨拶はするのが常識だというような教え方ではなくて、問題的教育とも言われていますが、「なぜか式」と言ってよいでしょう。「どうして」、「なぜ」こうするのかということをわかる言葉で相手に話してあげることが、非常に重要なのではないでしょうか。相手にわかる言葉で話すということは、私たち自身が当たりまえを問い直さなければ無理だと思います。新しく若い人はどうのこうのと勉強するよりも、たとえば挨拶ならこういうふうに自分は思うよとか、挨拶をするとこんなふうに得とくだとかわかる言葉で話して上げるほうが、するものだというようなやり方よりも非常に相手の中に入っていくのではないだろうかと思います。そういう意味で私たち自身が本当にわかっているかどうかということが要求されて、大変難しいということも思うわけです。

また私たちのような仕事をしていて申し上げたいのは、たとえば実はこういう悩みがあるんだという言い方をされることは少ないわけです。「なにしろともかく不安なんだ。」とか、「なんだか会社が嫌やになってしまった。」とかで、辞める場合は原因不明の退職というのが多くて、人事、労務担当者は悩んでいます。結局は自分が自分の問題はなんなのかわからないわけで、それを指導者が発見して上げることが大切だと思います。自分の問題にはっきり気付かせ、つかませて上げるということ、問題点を発見して上げるのです。不安という意味を辞書で引きますと、「漠然とした恐れ」と書いてありまして、どうしようもない、なんだか心配だというわけです。だからそれはこういう問題だということを相手の話を聞きながら整理をして上げる、それをともかく大切にして上げるということがいままでの私のやった方法では一番役に立ったような気がします。

仕事が自分に合わないと言うと、「合うか合わないかそんなにすぐしてわかるか。」というような応答はしないで、どういうふうに合わないのか、相手の合わないと感じていることを徹底して聞かなければわからないわけで、一方的に決めてしまうことは大変問題です。早くわかるリーダーというのが問題ではないだろうか。合わないという理由や内容がこちらの思うのと違うわけです。本人がわかっていないわけで、それをはっきりさせて上げるということが非常に重要なのではないだろうかと思うわけです。

またカウンセリングなどでよく言われていますが、若い人と接する時に共感ということが非常に大事だと言われていますが、これは共感することと、共感的理解ということの理解の違いをはっきりさせておかなければ、絵に画いた餅のごときものになってしまいます。共感するということは同じような感情を持つということなのです。同じような経験がない場合には、これは非常に難しいと思うのです。ところが共感的理解と言っておりますのは、こちら側が相手をわかろうとしたり、相手の身になるという姿勢を言っております。あり方を言っております。そのあり方というものと、共感するということを一緒にすることはできないのですからあり方としてそういう姿勢を見せるということならできるわけで、一つ具体的に申し上げれば、相手を本当に見るということを私たちは大切にしなければならないと思います。相手の話を聞くと、こちらの判断を入れてしまって、聞いたと同時にゆがんでしまいますからそのまま相手の言うことを聞くという訓練を私たちはしなければならないと思います。これは本当に難しいのですが。それをいつも原点に戻ってやるようにしているわけです。彼は甘えているではない

かとか、すぐこちらの判断が入ってしまうので、相手はこういうふうに考えているということで、こういうふうな若者だということをつかむことが非常に難しいのです。ありのままつかむということはよく言われていますが、すぐ判断が入ってしまいこれを実際にやる訓練を本当にしなければできないのです。管理者教育などというのは非常にそういうことが入っていますね。

この人間はすぐ辞める人間だとか、何かで判断するわけです。それはある意味の管理者能力かもしれないのですが、その辺である基本的な接し方が間違いであるということで、相手の本心を聞こうとするまえに私たちの基本的姿勢が間違っていて、聞くことができないということを私自身も含めて反省をさせられることが多いわけです。

加藤　では道正さんお願いします。

道正（講師）　まえのお二方の先生は精神的な面での御発表ですが、私はホーム活動の実践を通しての発表ですので、掘り下げますとたくさんあります。時間の制約がありますので、レジメから申し上げたいと思います。両者の連帯感の培養、これはどういうことかと言いますと、孤独な若者をなくすために、ホームを媒体として若者の仲間意識を養い、行動力をつけさせるということです。

いくつかありますが、単に教室とか、講座だけで終わらせるのではなくて、修了生をもってグループ化を促すということで、各講座の方からも委員として出ていただく。それから特に理解を深めるために、クラブリーダーの研修会は年二回ありまして、このうち一回はとちらにあります青年の家を使って一泊二日でやっています。ここで条例の範囲、自主運営といえども踏み出してはならないことをきちんとここで整理しながら指導をしています。

レジメにあります三の活動の拡充ということですが、これは単にホームだけではなくて、ホームを拠点とした野外活動にも力を入れていくということで、活動の内容はバラエティに富んだものに持っていきたいと思います。特にいくつかありますが、この中では「地方の時代」と言われる八〇年代ホームとして多くの事業を通してやるのですが、やはり地域住民との連帯感を深めるということで、ホームを中心として一つの地域体を考えることで、ホームは市民と利用者のパイプ役となる事業を行っています。

利用者と職員ということですが、ホームは単なる貸し館ではない。ホームは若者にとって入りやすい、過ごしやすいところ、そして職員は話しやすく、相談しやすい存在でなければならない、これを職員全員がモットーとしています。そして人生の模索の時代と言われる青春時代の幅広い悩みや相談に経験のほかに幅広い知識をもって職員は応えていかなければならないと考えています。

それからホームのPRということで申し上げてあります。全国のホームでは一番の悩みだと思いますが、私どももそのとおりです。生きた施設は若者と職員の協力の中からできあがるのです。ホーム自体はいいのですが、このホームの存在があまり知られていません。そのほかで、零細企業主との懇談会、これでまた一つPRしていこうと思っております。

レジメの二のホーム事業の運営計画ですが、これをちょっと申し上げますと、登録クラブに主体を持たせる行事を多くして、登録クラブと他のクラブとの相互の意思の疎通を図るパイプ役になっていかなければならないという目標をおいています。そして次のような取組をしています。一つには先ほど申し上げました利用者全員で取りかかる行事を年間四つ持っています。一番右は県外ホームとの交流会ということで、県外ホームにいき、それから県外の受入をします。と同時に会員が予算を持っているのですが、役員なり、選出された利用者が独自で先進地の視察を毎年行っているというようなところが若干ユニークではないかと思います。

それから地域との交わりということで、夏場に向けてのホームの展開をする盆踊大会です。関係七町会の町会長をはじめ、PTAの役員の方に全部ホームに入っていただいて、実行委員会を作りまして、三日間開放しなが

ら地域の子供たちとの接し方を研修します。これは金魚すくい、西瓜割り、綿あめ売りというようなことで、ホーム自体にこもらず、外へ向かって地域との連帯を深めていくという行事があります。

それからホーム祭はどこでもやっていますが、これも一般市民に開放しながら全員で取り組んでいます。それから若者の一番希望の多い年末ダンス・パーティがあります。この年間四つのことはみんなでやろうということになっています。

そのほかに登録クラブが主体となって実施するというものを、月一回ぐらいやっていこうとしています。現在登録クラブというのは一六から二〇ぐらいありますが、そのクラブが主体となってやっていくものがあります。一例を申しますと、歩け、歩け大会というのがあります。これは体力づくりクラブがやるのですが、だいたいマラソンと同じ四二・一九五キロメートルを一〇時間かけて一般市民の参加を受けながら、一班一〇名ぐらいで、だいたい五班ぐらいでやります。夜中の一〇時にホームを出発して朝方七時ごろ帰って来ます。そして市民の皆さんと連帯感を深めながら朝食をとって、完歩した者については完歩賞を利用者の会の会長から差し上げるというようなことで、地域との交流をしています。このようなことで、全体と登録クラブが主になって若者の持っている力を引き出すということで、こういう事業を計画しているわけです。

講座の取り方も全部利用者の意向を聞きながら行っているわけですが、いくつかあります。料理、お花、お茶は当然ですが、そのほかに皆さんの希望を聞きながら、たとえば雑学という講座があります。幅広く深くなくてもいいから身につけていこうとしています。これはだいたい一講座四時間ぐらいです。もっとも悩みの多い友情とか、恋愛とか、そういうパターンを組んで、二〇回ぐらい行っていますが、その辺のところがまたユニークではないかと思います。それから自動車講座と言いまして、いまの若者はメカに弱いのですが、運転免許は取っていても簡単な自動車の修理ができない、ですから簡単な修理ができる講座を開こうと考えました。幸いにして、県の関係では技術専門学校の先生がおりますので、その先生にお願いして、実地をしながらやっているわけです。これが変っている講座ではないかと思います。

以上申し上げてきた利用者の会ですが、私どもが先べんをつけたわけですが、私の属する南関東甲信地区五三ぐらいのホームを見てみますと、利用者の会の組織的なものが五三のうち二九ホームと増えています。そしてこの会を通してホームに集まる若者の力を伸ばそうとしています。いわゆる自主性、創造性を養っていこうとしています。

ホームの最後の課題ですが、働く若者たちのための施設を最大限に生かすために、施設の充実、機具、機材の整備はもちろんですが、私は若者たちの施設は職員の質にかかっていると思います。そういうことから言って職員の魅力が若者をひきつけるものだと思います。私どもの属する南関東甲信地区の五三ホームの内容をちょっと申し上げますと、職員数が二四五名です。このうち専任職員が一六八名で六八・六パーセント、兼任が七七名おります。公民館関係と兼務ということで七七名で三一・四パーセントです。専任職員数は平均三・一名、兼任職員は平均が一・四ですからこれを含めるとホーム当たりの職員数は四・六という数字が出て来ます。館長さんだけで見ますと専任が二六名です。半分が兼務でいるということで力が入っていないのではないかということですが、ホームに勤務する職員は長時間にわたったり、変則勤務があるのが実情です。そのためには専任職員の確保、適正な人員の確保が急務ではないかと思います。このことはいろいろの機会で陳情してありますが、関係機関の御指導を待つほかがないわけです。私はホームが職員にとって生きがいのある職場となり、またやる気のある職員が集まる魅力ある職場づくりが当面ホームの職員に課せられた問題ではなかろうかと思います。

加藤　それでは西村さんお願いします。

西村（講師）　二点あります。一点は自己

教育ということを書いて、そのまま説明はほとんどしていないのですが、カウンセリングなどが先ほど出て来ているわけですが、やはり同じように本質的には自らが自らを教育していく。これは聞きかじりですが、赤ちゃんがスプーンの使い方を覚えるのは母親の教育力などが当然あるわけですが、本質的には自分が何回もスプーンを落としたり、スープをこぼしたりという試行錯誤の中から身につけていくわけです。それが成人になってもそういう試行錯誤をすべて買いていくのが教育の本質ではないかという考え方があるわけです。そういうことに関連して、それを援助していく専門の職員の役割は何かということですが、先ほど言ったようにカウンセラー的な自らが成長していけるような援助をしていくことだと思います。その方法は何かと言われると非常に難しいと思うのですが、そういうものを求めていきたいと思っています。

もう一点ですが、職員集団論と言いましょうか、実際にこういうことをやりたい、ああいうことをやりたいと言った時に、意外と一番大きなつまずきになるのは、複数以上で職員として働いている場合、自分があまりハリキリすぎてしまうと腹を割った人間関係は難かしいと思います。これは学校の先生の例ですが、Aクラスの先生はよくハイキングに連れていってくれたりするが、Bクラスの年とった先生はあまり連れていってくれないとします。そうするとBクラスの生徒たちはすごく損だなと言うわけです。するとBクラスの担任の先生は非常に困るわけです。そういうふうな職員間の人間関係があって、なかなか若い諸君も思うようにできないというところが実際はあると思うのです。そういうところをベテランの職員はベテランで、もう一つちょっと違うところで、ハイキングへいくことばかりが仕事ではないのですから、違うところでビシッと協力する代わりに、そういうハイキングにいったりするときはBクラスの生徒も連れていってやろうではないかというような腹を割った人間関係が職員間にできていれば、相当現実でもいろいろなことができるのではないかと考えます。以上二点です。

加藤　当初はこのあと壇上で講師先生たちだけの意見交換とか、質疑をやろうと思いましたが、ちょうど時間になりましたので、ここで五分間休憩して、二時半過ぎから皆様方との意見交換に移りたいと思います。

（全体討議）

加藤　これから全体討議に移りますが発言される方はマイクのところにいらっしゃって、県名と所属と、お名前をお告げになってから発言していただきたいと思います。

私は休憩時間に「講師の人たちは何かいいことを言っているけれども、現実はそういうものではないなあ。」などというつぶやきが耳に入りました。それからまた「今日のテーマは伸ばそう若い力だけれども、テーマに沿った話がなかったなあ。」などというような御批判もありました。伸ばそう若い力というのは大変抽象的なテーマですので、講師の生先方のさまざまなお立場からさまざまな角度で切り込んでいっているのだと思って聞いているわけですが、そういった今迄の講師の発言に御不満がありましたらどんどん厳しく質問くださいまして、御意見も賜わりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。そのまえに講師の先生方で特にお話したいことがありましたら、どうか発言をお願いします。

野原（講師）　若い人を伸ばすという点で一つ申し上げたいことがあります。

いま、ノイローゼとか、自律神経失調症とか、心因反応とかいろいろ言われていますが、その中でもノイローゼになる人が非常に多いようで、その中身を見ますと、自分の良さや力というものを忘れてしまった一種の記憶喪失症ではないかと考えるわけです。

すべての人たちがそうだと思いますが、自分の欠点というものを非常に意識するようです。よく自己紹介などでも、若い人が、「私にはどこにも取りえがありません。」というように自己紹介をすることが多くみられますがそういうとき、私たちは即注意をするようにしております。自分の欠点は非常に気になりなんとか直そうと努力するのですが、エネルギーを使ったわりには意外に効果がないので、自己嫌悪に陥りがちなものです。私はもっと自分の長所を正しくつかんで、それを伸ばしていく努力をすべきだと思います。それは非常に楽しいことですから、大いに効果が上がるわけです。欠点は、生い立ちからのいろいろな要因に基づくものですから、なかなか簡単には直すことができないものです。だから長所を誰かが指摘してくださって、もちろんそれは正しくなければなりません。決してお世辞などではなくて、指摘してあげる、そして本人もそう思う。長所を伸ばしていくことによって短所が面白味というか、その人の魅力にすらなるわけです。つまり短所が長所の中に織り込まれて魅力になっていくのではないだろうかといつも若い人たちに話をするわけです。そういう意味でなぜもっとお互いに長所を見ないのでしょうか。これは訓練しなければできないぐらいになっています。

誰でも欠点にはすぐに気付くわけです。例えば会社に入ってすぐに会社の欠点にも周りの人の欠点にも気付きます。ですからよい面を見つけるためには訓練する必要があるのではないだろうかとよく言うのです。

もうすこし長所というものを正確に見てあげて、あなたのこの点は私にはない、本当にいいねと言ってあげる必要があると思います。

いまは悩まない若者という問題もあります。自分は常に正しいのだという人も増えていますし、悩みを持つということは弱者か馬鹿かなどと言われた時代もあったのです。

ですから悩まない人の問題ということも非常に起こっているわけなのです。悩まないのでみんな誰かのせいにするという人も非常に多くなっているわけです。そういう中でお世辞めいたものや若者に迎合したりする必要はないと思いますが正確に長所を指摘してあげることは必要で、この長所を見てくれる人が欠点を言ってくれた場合は聞く気がするものです。しかしこの人は自分の欠点しか見ないというような人が欠点を指摘してくれたとしても、聞く気がなくなるのです。私自身もそうですが、欠点しか見ない人間に欠点を言われたらどうも反発したくなると思うのです。

そういう点で、もうすこし正確に長所を見てあげて、それをお互いに話し合い、そのあとで欠点を指摘したりすることも必要だと思います。

ノイローゼはよい点を一時忘れてしまった記憶喪失症なのです。だからそういう意味で

激励などをすると必常に悪くなります。例えば「おれがついてる」とか、「もっとがんばれ」と言われた人は、他人からの援助を必要としなければならない自分なのかというような考えにとらわれ結果的には非常に悪くなりやすいものです。あなたにはこういう点があるのではないかと端的に正確に言ってあげ、本人が納得すれば落込みから上がって来ます。長所を伸ばしていく中に短所が織り込まれて、むしろ短所は魅力ですらあるというふうに話してみると、自己嫌悪とか、対人恐怖とか、思っていることが話せないとか、恥をかきたくないというようなことがなくなるようです。恥をかいてもいいわけですが恥知らずになれとは言わないほうがいいわけです。強い人間になれと言って恥知らずはよくないのです。恥ずかしいと思う心は素晴しいのだということも言わなければいけないわけです。非常に対人恐怖的な若者が、外交的な若者に比して増えていますがそれは、精神分裂症すら引き起こす非常に怖い時期です。そんな意味で長所、短所ということについて一言申し上げた次第です。

加藤　野原さんの長所、短所のお話をお聞きしていて、私も感じたのですが、私も若いころから、会社を離れて有楽町辺りで仲間と一杯飲むと、かならずそこで酒のさかなになるのは会社の欠点、上司の欠点だったわけです。なかなか長所というのは見えてこないものです。われわれも含めて戦後の日本全体がそのような感じがするのですが、日本の悪いところはいくらでも指摘できるけれども、われわれの住んでいる日本のいいところは何かと言われると、青年もそうなのですが、我々自身も分からなくなっています。マスコミも政府の悪口から始まって、いろいろな人々の悪いことばかり書くけれども、いいことはさっぱり書かないのです。そういう風潮の中で育ってきた若者なのですから、なかなか自分の長所は目につかないので、悪いところばかり目につくようになったのではないかなということを感じました。

それでは場内の討論に移りたいと思います。どなたかどうぞ。

中島（益田市勤労青少年ホーム館長）

毎年トップを切らなければ気分の悪い一言居士でございます。まず最初に司会者に申し上げたいのは、時間配分のことです。三時間の中で残りは一時間ほどになりました。

先生方に話していただくことも大事だとは思いますが、せめて半分にはしてもらいたいという希望です。もっと欲を言えばお話を一時間にし討論を二時間位していただくというのが希望でございます。

それでは早速質問に入ります。昨年は男の講師の方に質問しましたが、解答がやや不満だった点がありました。今年はまず紅一点の野原先生にお話を伺いたいと思います。

暴走族問題です。この問題は昨日政府でもたくさんの人を集めて話し合われたということをチラと聞きましたが、これが撲滅とか、あるいはこれを起こさないということも暴走族問題ではほっておけない問題ではないかと思っています。それから最後のリーダーの養成こそ緊急課題であるとして、括弧を見ると目立つ先輩、あるいは打ち解けて話せる人とあります。このリーダーというものは中間リーダーの養成ではないかと思います。

幹部リーダーの養成は誰でもやることであって、中間リーダーを養成しなくてはならないという気持を持っています。それから明日を担う働く青少年を伸ばそうということで、やはり指導者の問題について二、三申して適確な御解答を願いたいと思います。

まず外的に見ますと、いまの指導者は企業あるいはホームを通じてですが、非常に女性の指導者が少ないのではないかということを感じます。内容的には指導システムがやや古いのではないかと思います。たとえばお酒を飲んで苦楽を共にするというようなスタイルでは古いのではないかと思います。もっとスポーツとか、音楽とか、レクなどを通じて触れ合いを作っていく必要があると思います。

これを重ねていくことが大切ではないかと思います。

その次に、いまの指導者はアドバイスはできるれども、カウンセリングは難しいという気

持を持っています。というのはカウンセリングの専門技術を身につけている指導者が少ないということです。それから前にも申しましたが、やはりこれからは中間的なリーダーを養成しなくてはならない、これが非常に大事だと思うのです。その辺のことについて御解答を願いたいと思います。

加藤　野原さんよろしく。

野原（講師）　女性のリーダーもということで本当にうれしいです。どうもありがとうございます。いまのお話ですが、暴走族とか、大変極端な人をも相手にしなければならないということで、その問題は緊急に対しなければならない問題だとおっしゃっておりました。中間リーダーの養成ということは私もそのまま申し上げたいことでございます。職場の中にはライン・カウンセラーという人がおり、私どもは外から入るカウンセラーですが、みな限界があります。また年令の高い人が一八や一九の人に接するときに限界があります。

また二五、六歳あたりのリーダーが非常に打ち解けられるということを私は聞きましたが、いわば打ち解けられる人でなければ影響力を与えられないということです。非常に私たちは打ちとける努力ということをしなければならないのですが、みな限界があります。

そこで自分がここに相談に来た人は私が抱え込んで全部相手にしよう、なんとかしようというカウンセラーというのは一番問題なのです。ある者は早く医者の治療ベースに回したほうがいいということもあるわけです。

またカウンセリングというものはなかなか素晴しいものだという誇大妄想的に、あまり大きなことを言いすぎたために、カウンセリングがあまり発展しなかったということがありました。

学校の先生も苦しんだし、上司もがんばった、親もやった、そこにちょっとカウンセラーが登校拒否か何かの問題で加わったら成功した時、これはカウンセラーがよくやったというふうに思いたいのですが、そういう思い方ではなくて、私たちは限界があるということから出発したいと思うわけなのです。

そういう意味でぜひ私は誰か中間のリーダーというか、若いリーダーを育てなければならないと思います。

いま一七、一八、一九の人は二五歳以上の人ではもう話しても駄目だなどと言うし、打ち解けられるのは三〇歳までがせいぜいだなどと言います。私は四〇歳を過ぎていますが、それだったら何も自分が出ていかなくてもそういうカウンセリングのできる人を作ろうと考えています。常に自分の限界というものをお互いに感じなければならないと思います。職場では管理者がカウンセラーなどのところを持っていくのは自分の減点だというように考えて、自分で全部相談にのろうとする管理者もいますが、そういう管理者は困るわけです。ある者はカウンセラーに任せてしまおうと考えることが大切です。私も子供がいますが、子供の問題については斜の関係の誰か違う人に頼もうと考えています。子供のことでは感情に走り過ぎてしまうからというふうに、常に親の限界というものを持ち続けるということも一つ加えながら申し上げたかったわけです。どうもありがとうございました。

加藤　もう一つ中島さんの質問の中に、打ち解ける方法として一杯飲んだりするような方法は古いのではないか、新しい方法としてレク、スポーツなどを通じて打ち解ける方法があるのではないかとおっしゃいましたが、その点はいかがですか。

野原（講師）　お酒を飲むということも本当にある意味では打ち解けるものでございますし、レクもそうですし、それぞれ努力をなさっていらっしゃればそれぞれに効果があるのではないかという気が私はしているわけです。また話も非常に多くしている、言葉をかけるとおっしゃるのですが、肝心な話というものができなければ意味がないのです。

そこである種の酔った状態で終わってしまってはどうしようもないのです。ですから一杯飲んで、いい若者で誉めてもらいたくないから一生懸命カウンセリングをしたら、最後に若者が「それだけ言ってくれるのなら、そのままこの会社でやる。」と言うので、「ああよかった。」と部長さんがおっしゃった。翌

朝その若者は前と同じに「辞めます。」ということが多いわけです。そういう意味で本当に肝心な、つまり相手の言葉にならない言葉、言葉の裏の気持を理解しなければならないわけです。端的な例を挙げますが、これは皆さんもなさっていらっしゃることなので恐縮なのですが、たとえばある地方出身の人たちを連れて山に登ったら、そこで「ここから見たら新潟はどっちかな。」と女の子が言いました。

この人は新潟が故郷です。東京に出て来て、デパート関係の仕事をしたり、美容部員などをしていて、全部寮生活です。そしたら友だちは「あっちの方向じゃないの。」と言いました。それでもまたその女の子は聞くわけです。つまり新潟の方向について答を望んでいないのです。なぜこういう質問をしているかというとつまり、他の人は友だちがみんなできているのに、彼女はできていないから山の見える場所にある自分の家のことを思い出し、家の話をしたいからなのです。ですが後ろ向きの感じがあって本人はなかなか直接家のことを話しづらいわけです。それで当り障りのない新潟はどっちかなどという質問から入るわけです。ですから必ずピント合せをしなければならないのです。すぐ答えようとするとズレますので、それはこういうことを聞きたいのかと、一度自分で問い返すわけです。

どういうことかを本当に聞きたいのか話を向けてやったら、はじめてそれはこうだよと話すこともあります。ともかく肝心の話をしてもらうまでにいろいろなサインが出ますね。言葉にならない言葉、もっと言いたいと思っている言葉、音声に出ない言葉をどういうふうにつかまえていくかということは本当に難しいものです。このようなつまらない例を挙げて恐縮ですが、いくら遊んだりしても話してもらわなければ分からないということです。ですから言葉の重要性というものを非常に感ずるわけです。

加藤　毎年口火を切っていただいて恐れ入ります。あとにどんどん続いていただかなければ中島さんも困るのではないかと思うのですが、ほかの方どうぞ。

長友平（宮崎市勤労青少年ホーム館長）

ただいま青少年の健全育成という立場でお話があったわけですが、その場合に宮川先生、野原先生などがそれぞれの専門の立場でいわゆる人間の成長の一番大きな要因は人との触れ合い、人に対する思いやりが一番大事だというお話があった気がします。ただ我々が往往にしてこういった会議の中で話をする場合に、やはり社会という場の中での人間的な成長ということの考え方なのですが、やはり人間がそういったふうに健全に成長していく、青少年が健全に成長されるという基本的な基盤というのは家庭にあるのではないかという気がするわけなのです。家庭の場での人間的な触れ合いということが最近非常に弱くなっているような気がいたします。この辺を宮川先生、あるいわ野原先生がそれぞれの専門の立場でいろいろと捕えてきていらっしゃるのではないだろうかという気がいたします。

何か我々に御示唆できるものがありましたらお教え願いたいと思います。

加藤　お二方いかがですか。

宮川（講師）　今日非常に非行少年が多いという問題がありますね。特に非行化が低年令層化してきているということがあります。ピークが一四歳ですね。それに悪質化しているという問題があります。また家庭内暴力の問題がクローズアップされています。これらはすべて家庭に起因していると思うのです。

私は二人の娘を嫁にやりまして、家庭は終わった人間なのですが、私はよくマスコミでも言われますが、第一番におやじさんに権威がなくなっているという問題だと思うのです。

これは家庭のおやじさんに自信がなくなっていることから来ていると思いますが、こういうことは私は指導者の方にもあると思います。その結果どうしても若い人に迎合しがちだと思います。私はそういう点についてかなりワンマン的な性格である自分を感じているわけです。本当は「何をやっているか、おれについて来い。」というようなことでやりたいのです。時にはかなり強烈に若い連中を叱ることもあります。ですがやはりそう言ってもいまの若い連中に全部そっぽを向かれたの

では話になりませんから、若い気持を理解しようと努力をし、ある意味においては迎合だなという気もしながらやっています。

大人は、ホームの舵長さんが高齢者だというようなことを気にし過ぎると思うのです。

いまの若い連中だってたんだん高齢化社会の構成員として来るのですから、おれたちはもう年だなどということを言っていては始まらないのです。最近は成熟化社会という言葉が使われるようになって来ました。老人ではなくて長い人生のキャリアを経て成熟したのです。ところが自信を持たない父親は、権威がなくなって来ているわけで、あまり尊敬されていないのです。父親はよそにおかれていて、月給を持って運ぶだけの人間になって来ているという傾向があるのです。それから母親にどこまで真の愛情があるかということになりますと、母親というのは御承知のとおり、教育ママになって来て、スキンシップがないと言われています。私は日本の国全体がもう一べん日本の心、日本の良さというのを見つめるべきで、そのうえで若い人たちがなぜ暴走族に走ったり、非行少年に走るかを考えるべきだと思います。そうするとやはり人間疎外の社会が原因だと思うわけです。日本が敗後大変困ったことは、経済は成長したけれども、精神的には非常に貧困な国になって来たということです。若い者たちが心の豊かさということを失って来ています。私は若い人たちを本当に人間的にどう伸ばしていくか、人間性を彼らにどう教えていくかと言うこと、これが成熟した大人の任務だと思います。そうしなければ犯罪は多くなる一方です。

企業の独身寮の寮母さんたちの話でも、いまの社会の中では、妊娠の問題、自殺の問題などがあり裸に電線を巻きつけて、タイムスイッチでうまく死んだという話があります。

私は社会全体が本当にことで、もういっぺん日本は経済もさることながら、八〇年代をどのような人間社会としてどう作りあげていけばよいのかと考えてみて、その基本は家庭だと信じます。その家庭に対して私は「おやじよしっかりしろ、母親よほんとうに子供を人間的に愛する母親になりなさい。」と声を大にして叫びたい。東大出だから幸せになるわけではなく、中学出だから不幸になるわけではありません。心の豊かさとか生活の知恵など人間の幸福につながるものは学歴とは別問題であると常に思っています。

私のところにやって来る連中はだいたい高校生ですから、私は高校生の応援団長だと思って、学歴コンプレックスを取り払ってやろうと思っています。自分で生きていく力、自分で豊かな人生を築いていくその心構え、人間とは一体何かという追及というようなことについて、学校教育は何を教えているのか、人間不在の教育だと思います。私も学校の教員を一〇年やりました。若干個人的な感想を申し上げましたが、終わります。

野原（講師） 家庭の問題で一つ例を挙げますと、ある中学三年生の男の子が、彼女ができてからは、しょっちゅうその女の子から電話が入るわけなのです。母親が電話を取って息子に渡すと、あっちへいけと目で合図をして、お母さんが向こうへいったらこそこそ話をするので母親は大変イライラしてある日夕食のときに、「お前電話でいつもやっていないで、家に連れておいで。家で何かいろいろ買ってあげるから家で話したらいいじゃないか。」といったわけです。そしたらその時この息子は、「お母さん、見世物じゃないよ。」と言った。つまりお母さんの言葉にならない言葉、どんな女の子か見たいという気持ですね、自分の子のほうはちょっといい子だと思っていて、相手がおかしな女の子だったらどうしようというわけです。見たがっているということを子供は見抜いて、「お母さん見世物じゃないよ。」と言ったわけです。

この話で私が何を申し上げたいのかというと、これからの家庭ではお母さんがこの次に何を話すかということなのです。それはお母さんがせっかく親切に言ったのに、何を言うか、「最近お前は…」ということでいっぱい言ってしまうわけです。たくさんの言葉があるわりにはすこしも影響が中に入っていかないということが多いわけです。両親はたくさん言っていますが、子供の中に入っていない

です。そこでこのお母さんはひと言、「しまった見破られたか。」とか、本当に見たかったということを率直に、即ユーモラスに言うことが大切ですね。ユーモアなどということは自分からやることはないのです。素直というのは本当にユーモアがあるのです。そういう意味で指導者として私たちも時には服を脱いで接っしなければならない。カウンセラー然としたカウンセラーのところには相談に来たくないと思うのです。あまりおかしな感じでも困りますが、時にいろいろ自分が間違っていたとか、うまく当てられてしまったという時は率直、素直にそのとおりだということが必要だと思うのです。

新入社員のひと言として「自分が間違っていても決してそうは言わないのが管理者だ。」などと言う言葉をよく聞きます。ですから悪かった時は「ちょっと悪かった。」と言えばいいと思います。そういうふうに、自分が素直になるということをまず考えなければならないし、それはまた勇気がいることです。

こっちが素直になっても向こうはすごく強いので、とても素直になどはなれないと言っても、それでもなお自分がなるしかないと思います。相手に素直になれと言ってもなれるものではないと思います。そんな意味で母親のそういう態度のようなものが打ちとける一つの基盤にもなるのではないかとも思います。

またある会社の職長さんが、自分は「御苦労さん。」というあいさつをいつもするそうです。ところがどうも若者たちに不満がいっぱいあるわけです。形だけで言っていたのです。ですからそのことに気がついてある時ふと、これは形で言っていたからいけなかったのだ、心から「御苦労さん」と言うことにしようと思ったのです。私に言って来たその人は四〇代の大ベテランの方でして私はびっくりしたのですが、そういう素直な心が時にいろいろな服を脱ぐことになると思います。

また航海して来てかき殻などが船にいっぱいつくと船が沈みますが、私たちはどうもカウンセラーならカウンセラー臭さなどがすぐしみつくのです。それを削り取らなければ本当の相談者にならないのです。むしろベテランになるとそういうことが起きると思います。

それがいま母親の例として申し上げたかったかったことです。率直素直になりたいと思っているので申し上げたかったわけです。

加藤　「ありがとう」とか、「御苦労さん」という言葉を気持をこめて言うということは、本当に難しいと私も思います。司会者は本当は話してはいけないのですが、ちょっとお許し願いますが、いま家庭内暴力とか、校内暴力の話が出ましたが、警視庁で家庭内暴力を起こした少年の家庭を調べてみましたら、ほとんど例外なく夫婦に問題があったそうです。

夫婦ともにいるのだけれども、ちゃんとした心の交流ができていないとか、仲が悪いとか、暴力を起こした家庭の夫婦は例外なくちょっとすれ違った夫婦だということが出ています。また東京の墨田区で、校内暴力を起こした統計を私は拝見したのですが、全く一件もこの一年間起こしていない学校もある反面、八二件も起こした学校もあるわけです。

起こしていない学校と、起こしている学校は非常に差があるので聞いてみましたら、校内暴力を起こさない学校は、校長先生以下全職員が、心を通わせ、生徒指導に当っているという話を聞きました。家庭内暴力と校内暴力というのはどこかでつながりがあるのだな、やはり子供の上に立つ大人たちの気持が離れていると子供たちはとんでもないことをやるのだなあということを最近感じたことがありましたので、ちょっと報告させていただきました。何かほかにございますか。

牟礼（香川県勤労福祉協議会会長）

今日私は先生方のお話をお伺いしていまして、非常に「そうだ」と感じたことを申し述べたいと思います。それは野原先生がお話になった中で、共感するということと、共感的に理解するという話がありましたが、やはり指導するリーダーであれ、あるいはトップであれ指導する者には一応共感すると、そしてその上で共感的な理解を示すということが決め手ではないかと思うわけです。

話は多少違うかと思いますが、何かの本で読みましたが、武人で大悪人と言われていた

松永弾正が最後に討死する時には、相当な家来が行動を共にして倒れたそうです。ところが石田三成とか、明智光秀の知的な方は御存じのような最後を遂げたわけです。これらはどこが違うのでしょうか。松永弾正は人間というものは誰でも弱点を持っている。部下も持っているがおれも持っているのだというところがありました。光秀方はおれの考えていること、おれがしたいことは立派で、間違っているのはそちらだというような違いにあったというようなことが書いてありました。

本当に人間はひと皮はいでみると、たとえ学歴がどうであろうと、あるいは学歴がなくてもやはり人間として持っているところの長所なりあるいは弱点というものは共通したものがかなりあるのではないかと、こういう点からトップであれ、あるいはリーダーであれ、非常に大事なことは共感すること、しかもおれは二段も三段も立派だということではなくて、同じレベルに下ろして、自分も考えてみるとそういうような失敗もあり、また性格的にもそういう欠点を考えてみると自分にもあるという取り組み方、共感するということが非常に大事ではないかと思います。

いろいろ立派なお話を承わりましたが、本日その中で共感すると、共感的理解ということに非常に感銘を深くしました。お礼に代えまして、気持の一端を申し述べました。

加藤　ありがとうございました。はい、どうぞ。

小野　（愛媛県・福祉推進者）振り返ってみましたら、この勤労青少年福祉法が制定されたのはいまから一〇年ぐらいまえの四五年だったかと思います。その当時私は二五歳でした。その時に会社の命令で同じ年代ぐらいの者がよいので福祉推進者をやれと、言われ自分の勉強のつもりで第一回目の講習を受けました。

当時は日本の経済は高度経済成長の未路ではありましたけれども、高度経済成長の中にあったと思うのです。その後ニクソンショック、オイルショックによって企業は勤労青少年を育成しようとか、福祉をしていこうとかいう余裕がなくなったのが現状ではなかったかと思います。そういう歴史をたどりながら勤労青少年福祉シンポジウムが一〇年を経て今日行われており、ここに参加されている皆様方は勤労青少年ホームとか、青年の家などの行政レベルの方が多いのではないかと思います。それを振り返ってみても、企業は働く青少年にそれだけのことをする力がなくなって来た、する余裕がなくなって来た、企業防衛に一生懸命な現況だと思います。そういう状況の中で本年の「伸ばそう若い力」というテーマの下で勤労青少年をいかに伸ばしていくかということになります。企業だけでは駄目なのです。労働省が主管ですが、その労働省が主管である勤労青少年ホームはどこにあるかというとおそらく市までです。町村にはおそらくないでしょう。そういう状況で、一番底辺に働く町工場の勤労青少年は何によって福祉を求めていくか、その辺のところが私は大変難しい問題ではないかと思うのです。

これは単に労働省だけの問題でなく、文部省とか、自治省などがお互いに横のつながりを持ちつつ、市町村においては社会教育、たとえば公民館活動などのところから掘り下げていかなければ本当に働いていこうとする若い青少年に対する福祉がなされないのではないかというふうな不安を持っています。現実に私がこの役についた頃は盆踊とか、また慰安旅行とか、寝だけの海水浴などにいっていました。いける財力が会社にありました。

しかし現実には、いまそういう財力が会社にありません。まして町工場などの青少年をどのようにして伸ばしていくのか、これがやはり行政の大きな役割ではないかと思います。私はまだこの中では弱年で若者の部類に入ると思いますが、偉そうなことを申し上げますがお許し下さい。先ほど家庭的教育、親の教育というような話が出て感銘した次第ですが、私が現在のような仕事に携わるようになった動機は、文芸春秋を読んでいましたら、憲法問題に関してのいろいろな発言の中で、現憲法は鉛べりに刻まれた憲法であるというようなことが述べられていました。まさにそのとおりだと私は思いました。アメリカ占領下に

おける憲法が現在のいわゆる三C政策によって家庭、核、三世代というふうな日本特有の家族制度を徹底しました。そのことによって両親の心、ましてやおじいさん、おばあさんというふうないわゆる家族独特の構成をなくしました。

日本の一番よしとされている一国家一民族の分裂を図ったのがいわゆる憲法だと思うのです。それをいまになって国民が怒って、マスコミが飛びつくわけです。そのような中で教育されてきた私たちがいまの親なのです。

三〇代から四〇代の親がわれわれなのです。その親は何を持って子供たちに接するかと言いますと、私たちはまだじいちゃん、ばあちゃんから昔から受け継がれた浪曲的、人情的教育を受けてきました。これからはそういうふうな教育ができないような時代になっているのではないかと思うのです。それで私は常々よく言うのですが、親は立った木を見ると書きます。人が立った木を見てこれは立派な松だということです。息子は自分の心と書きます。ですから子供は親を見て成長するし、立った木を見ながら成長していくのだと思うのですが、その親になる人間がそのようないろいろな複雑な社会の中で成長した私たちですので、そこはもうすこし行政あたりで横の連絡を密にしてもらって、確固たる本音の行政を進めて行っていただかなければ、若い人、特に勤労青少年ホームなどにいけないもっともっと底辺の人の救い手にはならないのではないかと思います。大変まとまりのない意見を言いましたが、この中で一番若い部類の意見として述べさせていただきました。ありがとうございました。

加藤　ありがとうございました。ほかの方どうぞ。

――――　東京東久留米の商工会の企業の代表として今日はじめてやって来た者ですが、私たちの東久留米は東京の郊外で、いまの方のお話のように、行政サイドでの参加ということが長い間続いたそうですが、一度私たちも勉強にいってみたいということで今日やって来たわけです。私は四〇人ばかりの小さな企業を経営している経営者ですが、とかくこういうような催しは、行政の一つのショーとしてしか考えなかったのですが、今日は野原先生のお話を聞いて、来てよかったなと思っています。本音の話が出て大変感動しているわけです。私たちは小学校から中学、高等学校、大学という教育を受けても、日本の国の中では受け皿がないと思うのです。私も実はある学校を出てある大学へ奉職したわけですが、大学でせっかく教育を受けたにもかかわらず、日本の企業にはその教育の受け皿がないのです。いろいろな問題を経ながら就職という場面にぶつかるのですが、大会社というのは数字の上でも七パーセントしかありません。

あとの九〇何パーセントが小さな町工場から中堅の企業をわけです。こういう中でこういう人たちを受け入れ、どうしたらこの人たちと一緒に生涯教育をしていくという経営者がどれだけいるだろうか。やはり自分がやってみて理想に燃えて自分が会社をつくったのはいいですが、やはり利益を追求する企業ということになりますと大変難しいわけです。

そういうことを果たして行政の人たちが本当に知っているのかどうなのか。あえて小さい町ではありますが、役員を買って出て、これからの経営者が本当に勤労青少年云々を言うまえに、経営者としてこれからの青少年を預かる身として、どういうふうにわれわれは勉強していったらいいのかなということで、こういう会に参加したわけです。

その辺のところをもうすこし裏側から実態を知りながら勉強していただきたいと思います。先ほどから講師の先生方がそこに四人お座りですが、来年度からはもうすこし我々のサイドから机に並んでいかなければならないと思います。今後一流企業というのは、仕事に対する使命感、仕事をどういうふうに私たちが考えていくかという内容のある会社が一流企業だということを日本全国でみなさんとやっていくという場面にしなければ、いくら勤労青少年云々ということで何回もこういうことを聞いても暴走族はなくならないだろうし、シンナー遊びもなくならないだろうし、いろいろな問題が解決しないのではないかと思います。むしろ受け皿のわれわれの企業サイドでのこういう横のお互いの経営者の勉強

を国ぐるみでやって行くと、そして小さい企業であるけれども、仕事の使命感をどれだけその会社の社員が持っていて、そういうエネルギーが一流企業だということを世に説いていく、大人の生き様、しっかり生きることが青少年の本音で言う生き方ではないかなと感じています。先ほど学歴云々と言っていましたが、そんなことを大人がかっこよく言ってもいまの子供たちは信用しません。

事実いい学校に入り、いい大学へ入って、世に言う有名大学に入って就職するということは一〇月一日の新聞を広げてもみなさん御存じのとおりだと思います。そういう社会をまず私たちが地道に作っていくということをしなければ、いくらこれを開いたところでなかなか成果が上がらないのではないかと思います。私が最後に申し上げることは、私たちが一人の社員を募集しますと、何人かの方が来ますが、みんな社会の落ちこぼれです。

この中から企業の利益追求をした時にこういう人間は必要ないと、しかし手を差し伸べて、うちでぜひ勉強を一緒にしていこうよという少年や少女に何人か会うわけですが、残念ながら私たちのいまの企業防衛という立場からすると、そういう少年に「どうぞまた勉強してから来て下さい。」と言わざるを得ません。このように涙をのんで募集の度にそういう悲しい思いをするわけですが、やはり口では学歴が云々と言っても、そういう社会の底辺を私たちが愛情を捧げるシステムを作っていかなければ、青少年の育成ということは非常に難しいのではないかと思います。

要するに仕事の使命感をどういうふうに持つかということが一流企業だということを、ぜひ考えていただきたいと思います。

宮川先生は先ほど中小企業に誇りを持てと言っていましたが、私たちは誇りを持って仕事をしている人間です。大会社はかならず誇りを持つという論法ではないと思います。

宮川（講師）　いまのお二人のお話に大変感銘を受けました。非常に御熱心な中小企業の経営者なのですね。若い人たちに対して全社員を含めて生涯教育ということを考えていらっしゃいます。一企業の中では利益ももちろん追求しなければならないけれども、縁あってうちへ来てくれた人たちが非常に幸せになってもらいたいという大変近代的かつ将来を見通したお気持に私も敬服いたしております。私は毎月いくわけでもありませんが、定期的に研修を毎月やっている会社があります。

最初はかなり社員の方から反発がありました。会社サイドで教育するので、我々もそういう若い人たちの態度に対して初めは非常に苦労しました。今年で約三年ぐらいやっているのですが、社員の方たちの気風が非常に変ってきました。そこではやはり社長さんはそういうお気持だけれども、社員の若い人たちの中にやはり本当なら我々はかっこいい大企業へ就職したいんだ、ところが我々はやはりどうしてもこのような吹きだまりに来たんだというような意識を持つので、非常に困るというようなことを言っていました。そこで私どもが東芝などの寮生などとスポーツをやらせたり、いろいろな対話をやらせてみるのです。そうするとむしろ私は大手企業にいる若者たちの高卒などの連中のほうが生きがいを持っていないのです。どこまで偉くなれるかと言ったら課長になれるかどうかということは極めて問題なのです。ですからそのようなことを話し合ってみると、大企業の連中だからといってそんなに恵まれているわけでもないし、生きがいを持っているわけでもないということがだんだん理解も深まってきておりまして、やはりそこにはおやじと子供の関係のようなものがあるのです。だからうちからお嫁に行く時には本当に心配がない、この子がお嫁にいってくれても、もう大丈夫だというふうにして嫁にやりたいわけです。

ところがどうしても田舎から帰って来いというようなことで、この若い社員が帰る時には涙を流さんばかりで、それほど人情的では会社の経営がどうですかなどということを申し上げるわけですが、それぐらいに社員は愛されるのです。だから、むしろ私はいまおっしゃいましたあなた方のそういうところの中に素晴しい人間形成もありますし、特にその木村さんという方が言っていらっしゃいましたが、今年は大企業にみな採られて、特に人

が採りにくいと嘆いておられました。さっきの言葉はどういうふうにお取り願ったかわかりませんが、やはり若い人たちはみな同じだ。だから中小企業の方たちがもっと自分の生きる道というものを就職なりなんなりの時に探して、大企業へ行って定年までいれば食いっぱぐれはないと、安全な道だというだけでなくて、自分で何かができる道というようなものを、もうすこし学校を卒業される時にも考えていく若者がすこしは増えてきてくれないかと思います。

だから寮というものをなぜやるかというと会社の中ではラインの一従業員であったりする場合も多いので、寮ではなんでも自分たちで計画してやれる、それのインフォーマルな集団の中では意外に若者が発らつと伸びていきますし、寮で伸びればやはり発らつとした若者に育ちます。従って仕事だって面白くなって来ます。私どもは三五人ばかりの従業員の方で御熱心な会社の若い人たちとも接しさせていただいており、頭の下がるような経営者もよく存じております。そのようなところでもし誤解がありましたら、お許しを願いたいと思います。

道正（講師）　先ほど福祉推進者の二名ほどの方からお話がありましたが、これは一つの事例ですが、行政サイドだけで進めているホームの運営ではありませんので発表させていただきます。私は長野県ですが、年当初に福祉推進者の会長さん以下、各支部の部長さんと県内ホームの館長さんが同じテーブルにつきまして、いろゆる推進協の方の事業とホームでやっている事業とのドッキングをしまして、御理解をいただきました。

それをさらに下へ広げていただいて、中小、零細の本当に一人二人の企業にも広げてもらいたいということになりました。現実には私のホームでですが、本当に五人以下の零細企業が大部分です。中には一人という女性の方も来ておりますが、毎年一回は福祉員さんの皆さんと一諸にホームを研修の場にしてもらったり、あるいはリクリエーションの場として利用願っています。こういう取り組みをやっているところもありますので、御参考までに述べておきたいと思います。

――秋田県の本庄市の商工会の者です。

実はいままで勤労青少年ホーム、それから企業の推進者の方からお話がありましたが、私は福祉員の立場からひと言申し上げたいと思います。四人の先生方からいろいろ御指導いただきましたが、全くそのとおりだと思います。ただ私のまえにお話された企業の方が申しましたように、ホームなり、働く青年の家なり、また勤労厚生協会なりの施設を利用される方々はほとんど大企業なりに勤めている方だと思います。私が申し上げたいのは、その施設を利用しない、落ちこぼれと言いますか、地方にあっては零細な企業の従業員がほとんど参加しないのです。先ほど家庭教育なり、公民館教育という話がありましたが、むしろそういう方々を今後伸ばしていくのが、われわれ福祉員の仕事だと思いますが、委嘱は受けていますが、どこから取り組んでいいのかなかなか目安がたちません。毎年のように研修等もやっていますが、なかなか名案が浮ばないというのが実情です。

それから私たちは県の主催で推進者なり、また福祉員の合同研修会等も県で一括なり、またはブロックなりでやっていますが、参加者がなかなか集まりません。こういう点でも問題があるのではないかと思います。ましてそういう委嘱を受けながら参加もできないというような問題もありますが、企業の中には非常に企業が厳しいので、ほとんど従業員の参加もできないということもあります。

これはその人の問題もあると思いますが、そういう点につきまして、先生方からアドバイスなり、御指導をいただければありがたいと思います。

宮川（講師）　いまおっしゃったとおり、全く手の届かない青少年が一番問題だと思います。それで大企業の連中はレクリエーションの施設が会社の中にあり、体育館があったりするということもありますが、この寮生の手紙にもありますが、体育館やテニスコートがあっても割にやらない連中が多くなってきたとかいろいろあります。ところが大企業の人たちにしても勤労青少年ホームがあるとい

うことはあまり知らないのです。全般に私は勤労青少年ホームの存在というものが、マスコミもそんなに取り上げてくれているわけでもありませんから、これが非常に社会全般に対して認識がいきわたらない原因であろうと思います。それから若いそういう手の届かない人たちに、行政でどう手を届かしてもらうかということになりましても、これは労働者に大いにお考え願いたい問題ですが、これも正直言ってなかなか難しいことだと思うのです。そしてまたいまの若い人たちがたとえばホームというような存在を知らせても、なかなか参加して来ない社会になって来ているのです。これはなんでも一人で遊べるという世の中になってしまいましたから、たとえば新宿にある会社がありますが、そこに寮生がいるのです。寮の指導は何もやらなくていいんだ、一人で新宿で遊ぶところがいくらでもあるというお話でしたが、これは私のほうから言うと若干の抵抗を感ずる言葉なのです。事実それで若者は過ごせるわけですがやはり社会全般がもうすこし勤労青少年というものはだんだん数が少なくなって行く、勤労青少年こそ大切な国の宝ですから、その周囲の大人たちがやはりそういう人たちになんらかの声をかけてやったり、相談にのってやる必要があると思います。

私はどんな企業でも一人の管理職が二人か三人ぐらいはおれがとにかく面倒を見ていこう、家へも来いよ、女房の手料理で一杯飲めよと、話もしようじゃないかという言葉をかけられるならば私は若者は発らつと伸びていくと思います。みんな管理職は残業だなどということで会社でギューギューやられるし、家え連れて帰ったら奥さんがあなた家計にひびきますよ、と言われます。昔はそうではありませんでした。帰りに一杯飲んで帰ろうやということで、赤ちょうちんに若者を誘うということが、かつての古い時代だったと思います。ですから、やはり全体行政も考えてもらいたいと同時に、何かそういうところで声をかける大人というものがもうすこし増えていってくれなければいまおっしゃったような手の届かない若者たちが救われていかないと思います。ついそれが暴走に誘われたり、妙な方向の仲間についポッと誘われていく。やくざのところへ入ったら人情があります。

その人情の世界からは出て来られません。彼らは魅力があるのです。私はこういう結果になりやすいということで、マスコミにもいらっしゃった方ですが、加藤先生は何かマスコミの社会がホームの存在なり、もうすこし勤労青少年をみんなで育て上げていこうではないかという政治の姿勢、国のムードを作り上げなければ私は日本が本当に健やかに育っていかないのではないかという実感がしています。

加藤　後ろのほうの方どうぞ。

佐々木（長岡市勤労青少年ホーム館長）

同じホームを預かる講師の先生として、松本の道正先生にお伺いしたいのですが、先ほどホーム運営について、職員の資質の向上、施設の整備、やる気のある職場づくりが必要であるという御発言でしたが、全国に四六〇ぐらいあるホームのうち、大部分が市町立のホームではなかろうかと思っています。その市町の中におけるホームという施設の位置づけが最近は弱体化しているのではないかという感想を持っているわけです。ということは、一つに職員配置が公民館と兼務するとか、あるいは予算づけ等について十分にいかないとかということではないかと思っております。

このことを考えてみますに、官公庁行政が行政の節約というより、財政再建というようなことが必要な時期に、やはり行政としては住民の必要なところに、まず予算なり職員なりを配置し、ホームというようなところの行政の第一線に必要のないところは、とかく第二義的に考えられるのではないかというふうに思っているわけです。誤解があると困りますので、私の市ではそうだということではありませんが、全体的な見方がそういうことでなかなかホームの運営、ならびに本日のテーマのような推進に力不足があると思います。また私自身努力が足りないというようなことでもあろうかと思うのですが、こういう点はしばしば私ども館長同士の話合でも、財政的なものも必要ではありますが、ホーム組織について行政がてこ入れをして欲しいと思います。

そのことは具体的に言いますと、専門的にはなりますが、理想的なことを言えば勤労青少年福祉法というようなもので単独立法してもらうとか、あるいは地方交付税の基準利用額の項目に入れてもらうとか、あるいは地方自治法の歳出の項目に勤労青少年ホーム費というようなものを盛り込んでもらうとかいうようなことは考えられると思いますが、それもなかなかすぐにというわけにもいかないと思いますけれども、全体的にホームが財政再建のあおりを受けてしわ寄せをされる傾向に来ているのではないかというような感想を持っているわけですが、御意見をお伺いしたいと思います。

加藤　道正先生お答えにくいところもあると思いますが、よろしくお願いします。

道正（講師）　その御意見ですが、やはり施設そのものは市町の莫大な建設費で建ったわけです。それを最大に生かすということは、その自治体の上司の姿勢の問題ではないかと思います。私ごとで申し上げますと、たいたい一、八〇〇名の職員がおりますが、ホームの職員は五名です。毎年二月に人事異動の意向調査をしますが、ホームへの希望者はここで公言してもいいくらい役所ではトップです。

五名だけですので、全部の希望を通すわけにいきませんが、そういう職場づくりをしますと職員もやはり優秀な職員が自分でやってみようということで、やる気のある職員が集まって来るという事例があります。財政的な関係はお話があろうかと思いますが、要するに創意工夫をしまして、こういう厳しい時代ですから、二人だけの職員ではこれは長時間にわたる勤務ですから、輪番が本当に頻繁に来ますと、職員のほうがまいってしまいます。

少なくとも設置当時五、六名は最低限でも適正に配置していただきたいと思います。

そして勤務状態をお互いによくしながら、それなりの実績の中で各自治体の上司のほうもそういう施設の職員の待遇についても目を向けてもらいたいと思います。これはその方面につきましては毎年にわたりまして陳情をしているわけですので、職員の心構えも必要ではないかと思います。

加藤　閉会の行事がちょっとありますので、もう一人で最後にしたいと思います。どうぞ。

石樽（愛知婦人少年室協助員）

私が年がしらかもしれませんが、私は愛知の婦人少年室から二名、婦人だけでまいりました。勤労青少年福祉員会の会長さんが女だけでいって来なさい、しっかり聞いてきて下さいと言われたので、五時からがんばって来て、途中でコーヒーを飲んで、かならず眠らないようにということで、二人で必死になって筆記しました。婦人問題では毎年サンケイホールに来ていますが、こういう勤労青少年福祉シンポジウムは実は初めてです。協助員をしていますので、協力はしていますものの、シンポジウムは初めてであり、さっき衛藤先生の素晴しい話を聞き、婦人の野原先生にだいぶ活躍をしていただきましたので、女強しの感がありました。私は施設の子供が中学校を出るとその就職の職親でつくっている名古屋市四っ葉の会を一五年いまもしております。

それで自動車も買いました。そしてその子の就職やいろいろなことをやって来ましたので、今日ここで、そういうことを発表できたこともうれしいし、卒直に物を言うのには勇気がいるということと、それからいま一四歳の坊っちゃんに彼女を連れて来いと言ったら、見世物ではないというようなことは、全く私もいい教えをいただきました。限界があるというとも七二才ですが、民生委員が七五才になりましたので、それまでには整理をするつもりです。三年間を五人の先生方、衛藤先生のことをすこしでも自分の生活に組み入れまして、今日のシンポジウムの糧にしたいと思います。

加藤　全体討議の最後を御婦人の代表の御意見発表で終わらせていただくつもりでしたがあとひと方おられる様ですので、三〇秒だけお願いします。

――　私もこの四月に館長となったわけでまだ一番若いのではないかと思います。

まだ四〇才そこそこです。したがって労働省の主催ということで、私ははじめて出席したわけですが、四人の講師の方はそれぞれ違

った立場で本当に参考になる点が多々あったと思います。しかしその回答がやはり労働省に対する質問もあったと思います。その明確な回答を頂くためには今後来年行われるこういうシンポジウムにはぜひ労働省からも出ていただいて明確な回答をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

加藤　いまの方のお話のように、シンポジウムの運営のあり方、時間の配分、講師人選等に関しても御意見がありました。ここに労働省の方もいらっしゃいますが、私から労働省のほうに趣旨をよく伝えまして、さらにいいシンポジウムに発展させていきたいと私も願っているわけでございます。今日は大変お忙しいところ長い時間静かに聞いていただきまして司会者として大変感謝いたします。

日本の青少年は世界の青少年に比べますと、仕事の中に生きがいを求めている青年が一番多いわけで、大変心強く思っているわけです。

そういう青年をさらに能力を発揮させて、若い力を積極的に伸ばすように、皆様方指導者のお力添えをこの壇上からお願いしますて、今日のシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

閉会のことば

（労働省婦人少年局年少労働課長金子隆弘）

本日は朝からいままで長時間大変な御協力をいただきましてありがとうございました。

しかしながら、先ほどシンポジウムの運営についてのお話もありましたように、特に今回は各講師の先生方に持っていただく時間も毎いというようなこともありまして、先生方の意にそえなかった点も多々あったかと思います。その辺をお詫びし、また御参加の皆さん方の御意見、かなりいろいろな方々が積極的に、かつ大きな声でお話しいただいたということ、さらに単なる行政のショーではないというふうにおっしゃっていただけたことは非常にうれしいことでございました。

こういった催しというものが、今後ますます意義あるものになっていくように労働省として尽力したいと思っております。本日はどうもありがとうございました。これで閉会します。

（拍手）